『比較論理学研究』第 9 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2011)

Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa) の研究 —VP3.7.67–69: A 1.4.51 akathitaṃ ca (1)

小川　英世

0. Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」章 (Sādhanasamuddeśa) 第 45 詩節から第 89 詩節において、バルトリハリ (Bhartṛhari) は kāraka すなわち〈行為〉(kriyā) の〈能成者〉(sādhana) の一種である〈目的〉(karman) を論じている。そのうち第 67 詩節から第 79 詩節において彼が取り上げるのは、A 1.4.51 akathitaṃ ca に関して展開されたパーニニ文法家達の議論である。

A 1.4.51 は以下のような規則である。

「[他の kāraka 術語を] 与えられない [kāraka] は〈目的〉と呼ばれる」

この規則は例えば以下の事例において *go* の表示対象である牛に〈目的〉という術語を付与する。

[1] *gāṃ dogdhi payaḥ* (「彼は牛の乳を搾る」 *gām*, acc. sg. f.; *dogdhi*, *duh* 3rd sg. pres.; *payaḥ*, acc. sg. n.)

この文が表現している事態においては、A 1.4.24 dhruvam apāye 'pādānam によって牛を〈起点〉(apādāna) として特定することができる[1]。したがって [1] は次の文と意味的に等価である。

[2] *gor dogdhi payaḥ* (「彼は牛から乳を搾る」 *goḥ*, abl. sg. f.)

A 1.4.51 はこのように〈行為〉の参与者である kāraka を A 1.4.51 以外の A 1.4.23 kārake の支配下規則において規定されている特定の kāraka として表現しようと意図しないときに、その kāraka に〈目的〉という術語を付与することを許す規則である。

さてここで以下の文を見よ。

[3] *māsam āste* (「彼は一ヶ月の間ずっと座っている」)

[4] *godoham āste* (「彼は牛の乳が搾られる間ずっと座っている」)

[5] *krośam āste* (「彼は一クローシャ行く間ずっと座っている」)

[6] *kurūn svapiti* (「彼はクル国を行く間ずっと眠っている」)

パタンジャリに先行するパーニニ文法家達は、[3] における時間 (kāla) としての月 (māsa)、[4] における搾乳 (doha)、[5] における道のり (adhvan) としてのクローシャ (krośa)、[6] における国土 (deśa) としてのクル国は、A 1.4.51 によって〈目的〉と呼ばれると考える[2]。しかしながら、パタンジャリはこれらの事例における時間月等は A 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma によって〈目的〉と呼ばれ得るという見解を提示する。

ところで、これらの事例において使用されている動詞語根 *ās* (「座る」)、*svap* (「眠る」) はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根 (akarmaka、自動詞) である。時間月等が〈目的〉と呼ばれるならば、これらの動詞

[1] この規則は、x からの分離 (apāya) に関する基点 x に「〈起点〉」(*apādāna*) という術語を付与する。

[2] Nyāsa on KV to A 1.4.51: sarva ete kālādayo 'kathitāḥ pūrvavidheḥ kasyacid apravṛttatvāt / これらの事例における *māsa* 等への第二格接辞の導入は A 2.3.2 karmaṇi dvitīyā による。注 65 を見よ。

語根はもはや「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」とは呼ばれ得ないのではないかという問題が起こる。パタンジャリはこの問題を「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」における〈目的〉を特定することによって回避する。

VP 3.7.67–69 においてバルトリハリが論ずるのは、これらの時間、行為（bhāva）、道のり、国土という〈目的〉に関するパタンジャリの議論である。

なお、第 67 詩節から第 69 詩節は以下のとおりである。

VP 3.7.67: kālabhāvādhvadeśānām antarbhūta-kriyāntaraiḥ /
sarvair akarmakair yoge karmatvam upajāyate //

「時間（kāla）、行為（bhāva）、道のり（adhvan）、国土（deśa）には、それらがいかなる動詞語根と結合しようと―それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根であろうとそうでなかろうと―、動詞語根が意味として内包している別の〈行為〉によって〈目的〉たる在り方が生まれる」

VP 3.7.68: ādhāratvam iva prāptās te punar dravya-karmasu /
kālādayo bhinnakakṣyaṃ yānti karmatvam ut-taram //

［第一解釈］「しかしながら、それら時間等は、同じように（iva）、実体〈目的〉に対して〈場〉となっている。それらは、［〈行為〉と実体〈目的〉の関係が成立した］後に〈目的〉となる。［それら時間等の］〈目的〉たる在り方は［実体〈目的〉のそれと］地位を異にする」

［第二解釈］「しかしながら、それら時間等は、同じように、実体〈目的〉があるとき、［それを通じて〈行為〉の］〈場〉となっている。それらは、［〈行為〉と実体〈目的〉の関係が成立した］後に〈目的〉となる。［それら時間等の］〈目的〉たる在り方は［実体〈目的〉のそれと］地位を異にする」

VP 3.7.69: atas taiḥ karmabhir dhātur yukto 'dravyair akarmakaḥ /
lasya karmaṇi bhāve ca nimittatvāya kalpate //

「したがって、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根は、それら実体ではない〈目的〉と結合するとき、〈目的〉を表示する *l* 接辞の導入の根拠となると同時に〈行為〉（bhāva）を表示する *l* 接辞の導入の根拠ともなる」

1. ślokavārttika on A 1.4.51

1.1 A 1.4.51 に対して以下のślokavārttika が述べられている。

Ślokavārttika 7: dhruvaceṣṭitayuktiṣu cāpy aguṇe tad analpamater vacanaṃ smarata //

「静的な〈行為〉（dhruva）と結びついている動詞語根［すなわち、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根］と動的な〈行為〉（ceṣṭita）と結びついている動詞語根［すなわち、それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根（他動詞）］の場合、非従属的な〈目的〉（aguṇa）を表示するために *l* 接辞等が起こる、というかの知恵浅からざる先生の言明をあなた方は思い起こせ」

このślokavārttika は以下の文を説明する。

[7] *māsam āsyate devadattaḥ*（「デーヴァダッタは一ヶ月の間ずっと座らされている」*māsam*, acc. sg. m.; *āsyate*, *ās-ṇic* 3rd sg. pres. pass.; *devadattaḥ*, nom. sg. m.）
[8] *śāyyate krośaṃ devadattaḥ*（「デーヴァダッタは一クローシャ行く間ずっと寝かされている」*śāyyate*, *śī-ṇic* 3rd. sg. pres. pass.; *krośam*, acc. sg. m.）

これらの文は以下の文に意味的に等価である。

[9] *māsam āsayati devadattam*（「彼は一ヶ月の間ずっとデーヴァダッタを座らせている」*devadattam*, acc. sg. m.）
[10] *śāyayati krośaṃ devadattam*（「彼は一クローシャ行く間ずっとデーヴァダッタを寝かせている」）

[7] と [9] における動詞語根*ās-ṇic* はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根*ās*（「座る」）に使役接辞*ṇic* が後続する派生動詞語根であり、[8] と [10] における動詞語根 *śī-ṇic* はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根*śī*（「寝る」）に使役接辞*ṇic* が後続

する派生動詞語根である。これらの文におけるデーヴァダッタはA 1.4.52に基づき〈目的〉と呼ばれる[3]。したがって以下の文が成立することが前提されている。

[11] *māsam āste devadattaḥ*（「デーヴァダッタは一ヶ月の間ずっと座っている」）

[12] *śete krośaṃ devadattaḥ*（「デーヴァダッタは一クローシャ行く間ずっと寝ている」）

[7] *āsyate*、[8] *śāyyate* における *l* 接辞の代置要素-*te* はA 3.4.69によって〈目的〉を表示する[4]。A 3.4.69は以下のような規則である。

A 3.4.69 laḥ karmaṇi ca bhāve cākarmakebhyaḥ //

「*l* 音はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根（sakarmaka）の後では〈目的〉と〈行為主体〉を表示し、〈目的〉をもたない動詞語根（akarmaka）の後では〈行為〉（bhāva）と〈行為主体〉を表示する」

ここで問題が起こる。ślokavārttika 7は当該のデーヴァダッタを「非従属的な〈目的〉」とする。したがって、[7]–[10]においては、派生動詞語根*ās-ṇic*、*śī-ṇic* が二つの〈目的〉を有する動詞語根であり、デーヴァダッタに相関する従属的な〈目的〉が存在することが要請される。[7]–[10]において従属的な〈目的〉として機能するのは、時間月と道のりクローシャである。このことはそれらが[11]–[12]においても〈目的〉と呼ばれるものであることを示唆する。しかし、動詞語根*ās*、*śī*はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根である。したがって、時間等がそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根にとって〈目的〉と呼ばれることを規定する追加規定の定式化の必要性が指摘されることになる。

1.2 その追加規定とは以下のślokavārttika 14–15である[5]。

Ślokavārttika 14: kālabhāvādhvagantavyāḥ karmasaṃjñā hy akarmaṇām //

「実に、『時間、行為（bhāva）、踏破さるべき道のり（adhvagantavya）は、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［が表示する〈行為〉］に関係して〈目的〉と呼ばれる』という追加規定が定式化されるべきである」

Ślokavārttika 15: deśaś ca //[6]

「さらに、『国土』（deśa）は［それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［が表示する〈行為〉に関係して〈目的〉と呼ばれる』］という追加規定が定式化されるべきである」

パタンジャリはすでに冒頭において紹介した文を例文として提示する。

[3] *māsam āste*（「彼は一ヶ月の間ずっと座っている」）[7]

[4] *godoham āste*（「彼は牛の乳が搾られる間ずっと座っている」）[8]

---

[3] A 1.4.52については本論2を見よ。

[4] *laṭ* → *tiṅ* → *ta* (*te*)

[5] Uddyota on MBh to A 1.4.51: nanv akarmakāṇāṃ ṇyarthakarmasattve 'pi dvikarmakatvābhāvāt dhruvayuktiṣv aguṇa ity asaṅgatam ato bhāṣye kāleti / それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根に使役接辞が後続する派生動詞語根が表示する〈行為〉はA 1.4.52に基づき〈目的〉をもつ。しかし、その〈行為〉が二つの〈目的〉を有するということは成立しない。この意味でślokavārttika 7は妥当性を欠く。そこで述べられるのがślokavārttika 14–15である。このようにナーゲーシャはślokavārttika 14–15導入の意図を説明している。

[6] この varttika 15はślokavārttika の後半行の一部であると考えられる。Kielhorn は vārttika と見なしていない。Nirṇayasagar 版は提示の通りである。Nyāsa にはślokavārttika 全体が次のような形で提示されている。Nyāsa on A 1.4.51: kālabhāvādhvagantavyāḥ karmasaṃjñā hy akarmaṇām / deśāś cākarmakāṇāñ ca karmasaṃjñā bhavanti ca // なお、Vedavrata は vt. 15 を deśaś cākarmaṇām と想定し、角括弧で括っている。ヘーラーラージャは vts. 14–15を上記のように読んでいる。VP 3.7.67.0を見よ。

[7] Joshi/Roodbergen [1975: 218]: 'he sits for a month'.

[8] Joshi/Roodbergen [1975: 218]: 'he sits throughout the milking of the cows'.

カイヤタは行為（bhāva）もた時間とみなし得ることを次のように述べている。Pradīpa on MBh to A 1.4.51 (II.425): kāleti / māsādaya eva kālavācitvena loke prasiddhāḥ, na tu godohanapānādaya iti saty api bhāvasya kālatve pṛthagupādānaṃ kṛtam / nirjñātaparimāṇā hi kriyā anirjñātaparimāṇāyāḥ kriyāyāḥ paricchedāyopādīyamānā māsagodohādiśabdavācyā kāla iti darśanam /（「まさに *māsa*（「月」）等は時間を表示するものとして世間ではよく知られているが、牛の乳搾り（godohana）や牛の水飲み（gopāna）等はそうではない。したがって、行為（bhāva）には時間性があるとしても、［それは］別立てされている。［根底には以下の時間］観がある。『実にそれの分量（parimāṇa）が確定的に知られている〈行為〉は、それの分量が確定的に知られていない〈行為〉を画定するために言及されるとき、*māsa*（「月」）や *godoha*（「牛の乳搾り」）等の

[5] *krośam āste*（「彼は一クローシャ行く間ずっと座っている」）[9]

[6] *kurūn svapiti*（「彼はクル国を行く間ずっと眠っている」）[10]

[13] *pañcālān svapiti*（「彼はパンチャーラ国を行く間ずっと眠っている」）[11]

ślokavārttika 14–15 の追加規定は、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根の場合にも、それが表示する〈行為〉に関与する、時間表示語（*māsa*）、行為（bhāva）表示語（*godoha* ← *gor dohaḥ*）、道のり表示語（*krośa*）、国土表示語（*kuru*、*pañcāla*）の表示対象に〈目的〉という術語がA 1.4.51 によって付与されるべきことを述べている。

パタンジャリはA 1.4.51 に対する Bhāṣya においてはこのślokavārttika 14–15 の提案に関して議論しない。それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根（akarmaka）と時間等の〈目的〉の問題は、A 1.4.52 と A 2.3.5 に対する Bhāṣya において議論される。

2. MBh on A 1.4.52

A 1.4.52 は以下のような規則である。

A 1.4.52 gatibuddhipratyavasānārthaśabdakarmākarmakāṇām aṇikartā sa ṇau //

「進行（gati）、認識（buddhi）、飲食（pratyavasāna）を意味する動詞語根、それが表示する〈行為〉が音声を〈目的〉とする動詞語根（śabdakarma）、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根（akarmaka）の場合、それらが使役接辞*ṇi(c)* を後続しないときの〈行為主体〉と呼ばれる kāraka は、それらが使役接辞を後続するとき、その使役接辞で終わる動詞語根が表示する〈行為〉に相関して〈目的〉と呼ばれる」

ここではそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根の例のみを挙げよう。動詞語根は*ās*（「座る」）である。

[14] *āste devadattaḥ*（「デーヴァダッタは座っている」）

[15] *āsayati devadattam*（「彼はデーヴァダッタを座らせる」）

[14] においてデーヴァダッタは*ās* が表示する座〈行為〉に対して〈行為主体〉であり、[15] においてデーヴァダッタは*ās-ṇic* という使役動詞語根が表示する座らせる〈行為〉の〈目的〉である。

この規則に対して以下のような vārttika が述べられている。

Vt. 8: akarmakagrahaṇe kālakarmakāṇām upasaṃkhyānam //

「[規則中の]『それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根』の言及に関しては、『時間

語によって表示されるべきものとして、時間とみなされる』」）ここにカイヤタが提示する時間観はバルトリハリが VP 3.9.77 で述べているところのものである。翻訳研究 VP 3.7.67.12、注 64 を見よ。

[9] Joshi/Roodbergen [1975: 218]: 'he covers a *krośa* while sitting'.

ślokavārttika 14 中の *adhvagantavya* はクローシャのような道のりを意味する。この複合語（*adhvan-gantavya*）は文法的な説明を要する。カイヤタは次のように述べている。Pradīpa on MBh to A 1.4.51 (II.425): adhvā cāsau gantavyo 'dhvagantavyaḥ / ata eva nipātanād viśeṣaṇasyāpi paranipātaḥ / gantavyatayā loke yaḥ prasiddhaḥ krośayojanādir niyataparimāṇas tasyaiva karmatvaṃ nānyasyety adhvānaṃ svapitīti na bhavati /（「*adhvagantavya* は *adhvan*（「道のり」）と *gantavya*（行かれるべき）の karmadhāraya 複合語である。まさにこのゆえに、限定者［を表示する語］であっても［複合語において］後置されるのは既成形提示のためである。行かれるべき［道のり］として世間で周知されている、特定の分量を有するクローシャ、ヨージャナ（yojana）、他ならぬそれらこそが〈目的〉と呼ばれるのであって、それ以外のものがそう呼ばれるのではないから、**adhvānaṃ svapiti* という表現はない」）

なお、カイヤタは当該の複合語に異読があることを指摘している。Pradīpa on MBh to A 1.4.51 (II.425): kecid adhvagatyantā iti paṭhanti / tatrāyam arthaḥ—gater anto niṣṭhā niścayo vā yeṣu te gatyantāḥ—krośayojanādayaḥ / adhvano gatyantā iti ṣaṣṭhīsamāsaḥ /（「ある者達は *adhvagatyantāḥ* という読みに従う。その場合、意味するところは以下のとおりである。*gatyanta* は saptamī-bahuvrīhi であり「そこにおいて進行の完了（anta = niṣṭhā）があるもの、あるいは［進行したとの］決定（niścaya）があるもの」を意味し、クローシャ、ヨージャナ等を表示する。さらに *adhvagatyanta* は *adhvano gatyantaḥ* に等価な ṣaṣṭhī-tatpuruṣa であり、「道の距離」を意味する」）

[10] Joshi/Roodbergen [1975: 222]: 'he sleeps in the country of the Kurus'. この文は眠る〈行為〉に対する〈行為主体〉がクル国内の村々を行く間ずっと眠っていることを意味する。カイヤタによれば、「国土」（*deśa*）という語によって意図されるのは、村々の集合（saṃstyāya）である。Pradīpa on MBh to A 1.4.51 (II.425): saṃstyāyaviśeṣaḥ kurupañcālādir deśa iha gṛhyata . . . / Uddyota on MBh to A 1.4.51 (II.426): saṃstyāyaviśeṣaḥ grāmādīnāṃ samūhaviśeṣaḥ /

[11] Joshi/Roodbergen [1975: 222]: 'he sleeps in the country of the Pañcālas'.

［等］を〈目的〉として有する動詞語根の場合も同様である』という追加規定が定式化されるべきである」

パタンジャリは以下のような例を挙げている。

[16] *māsam āste devadattaḥ*（「デーヴァダッタは一ヶ月の間ずっと座っている」）

[17] *māsam āsayati devadattam*（「彼は一ヶ月の間デーヴァダッタをずっと座らせている」）

[18] *māsaṃ śete devadattaḥ*（「デーヴァダッタは一ヶ月の間ずっと寝ている」）

[19] *māsaṃ śāyayati devadattam*（「彼は一ヶ月の間デーヴァダッタをずっと寝かせている」）

[16] における動詞語根*ās*、[18] における動詞語根*śī*は「時間［等］を〈目的〉として有する動詞語根」(kālakarmaka) である。これらの動詞語根は時間等を〈目的〉として有する点で「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」である。したがって、[17] と [19] の派生に A 1.4.52 は適用されず、その派生のためには vt. 8 の追加規定が必要となる。A 1.4.51 に対する ślokavārttika 14 によってそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根が表示する〈行為〉に関与する時間、行為 (bhāva)、道のりが〈目的〉と呼ばれることが前提されている。

vt. 9 は上記の追加規定に代えて「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」の拡大適用を提案する。

Vt. 9: siddhaṃ tu kālakarmaṇām akarmakavad-vacanāt //

「しかし、［所期の事例は］成立する。なぜなら、『時間［等］を〈目的〉として有する動詞語根はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根に准ずる』と定式化されるべきであるから」

この vārttika は、時間等を〈目的〉として有する、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根を「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」とみなすことを提案する。「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」という術語およびそれに基づく文法操作の拡大適用の提案である。

パタンジャリは、これらの vārttika の提案を否定する。パタンジャリは、A 1.4.52 に言及される「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」が意図するものは何かを論じ、動詞語根*ās* 等は時間等を〈目的〉としてもつものであっても、そのことによってそれが「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」と呼ばれることは排除されないとする。パタンジャリは A 1.4.52 に言及される「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」に関して三つの解釈を提示し、そのいずれの解釈によっても、このことは成立することを明らかにする。その論理は以下のとおりである。

2.1. *akarmaka* 解釈 1

パタンジャリはまず次のように述べる。

「［解釈 1］［A 1.4.52 中に］『それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根』(*akarmakāṇām*) と述べられている。
特定の動詞語根は、時間、行為 (bhāva)、道のりによって、特定の時に (kadācit)、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根となる、ということはない。したがって我々は次のように考える。すなわち、特定の場合に (kvacit) それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であるもの、それが［『それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根』である］」[12]

カイヤタによれば、「特定の時」(kadācit) とは、〈行為〉だけが表現しようと意図され、時間等の〈目的〉は表現しようと意図されない時である。すなわち、この解釈では「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」とは、それが表示する〈行為〉に参与する〈目的〉が表現しようと意図されない動詞語根である。当然この解釈では、それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根である *pac*（「料理する」）も、それが表示する料理〈行為〉に参与する〈目的〉が表現しようと意図されない場合には、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」に分類されなければならな

[12] MBh on A 1.4.52 (I.338.6–7): akarmakāṇām ity ucyate na ca kecit kadācit kālabhāvādhvabhir akarmakāḥ / ta evaṃ vijñāsyāmaḥ / kvacid ye 'karmakā iti //

いことになる。したがって、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」の決定に〈目的〉に対する表現意図の存否を導入してはならない[13]。

パタンジャリは、動詞語根が「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」と呼ばれるのは「特定の場合」(kvacit) であると言う。話者の意図に依存しない「特定の場合」とは、カイヤタによれば、〈目的〉が実体 (dravya) である場合である[14]。カイヤタは明らかにバルトリハリの VP 3.7.68 を念頭に置いている。

以上から、解釈 1 によれば、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」とは、それが表示する〈行為〉が時間等といった〈目的〉以外の、実体である〈目的〉をもたない動詞語根である。この「実体である〈目的」については後述する[15]。

なお、カイヤタは bahuvrīhi 複合語 *akarmaka* の複合語構成要素以外の項目の意味 (anyapadārtha) が動詞語根である場合と動詞語根の意味である場合の二つの場合を検討している[16]。その要点を示せば以下のとおりである。

1. 動詞語根

一例であってもある動詞語根と〈目的〉表示語との共使用が観察されるならば、たとえ他の例において共使用が観察されないとしても、語形の同形性からその動詞語根を「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」と呼ぶことはできない[17]。

2. 動詞語根の意味

動詞語根の意味である〈行為〉に参与する〈目的〉が表現しようと意図されない場合には、〈行為〉は〈目的〉をもたない〈行為〉である。この場合には、話者の意図によって同一の〈行為〉が〈目的〉を有する〈行為〉と〈目的〉をもたない〈行為〉に差別化されるという不合理が帰結する[18]。

さらに、時間という〈目的〉が参与する座〈行

---

[13]Pradīpa on MBh to A 1.4.52 (II.432–433): nanu kriyāmātravivakṣāyāṃ kālādīnām avivakṣitatvāt tair apy akarmakatvaṃ bhavaty eva yathā śete devadatto na bhuṅkte iti / atrāhuḥ—atyantāvidyamānakarmāṇo dhātavo 'karmakagrahaṇena gṛhyante na tv avivakṣitakarmaṇaḥ, anyathā pacādīnām api karmāvivakṣāyām akarmakanibandhanāni kāryāṇi bhaveyuḥ / (「[反論]〈行為〉だけが表現しようと意図される場合には、時間等は表現しようとは意図されないから、それら［表現しようと意図されない時間等、すなわち時間等の非存在］によっても表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であるということがまさに成立する。例えば、*śete devadatto na bhuṅkte*（「デーヴァダッタは寝ていて食べてはいない」）［におけるそれが表示する〈行為〉の〈目的〉が表現しようと意図されない動詞語根 *bhuj*（『食べる』）］のように。

［答論］これに対して［ある文法家達は］次のように言う。［A 1.4.52 中の］*akarmaka*（「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」）という語から理解されるのは、それが表示する〈行為〉に対して絶対的に〈目的〉が存在しない動詞語根であって、それが表示する〈行為〉に対して〈目的〉が表現しようと意図されない動詞語根ではない。もし後者が理解されるとすれば、動詞語根 *pac*（「料理する」）等の場合も、それが表示する〈行為〉に対して〈目的〉が表現しようと意図されない場合には、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根に依拠する文法操作が適用されることになるであろう」)

[14]Pradīpa on MBh to A 1.4.52 (II.433): kvacid iti / dravya eva karmaṇi saty akarmakā ity arthaḥ / (「『特定の場合に』(kvacid) とは、〈目的〉がまさに実体である場合にそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根となるという意味である」)

[15]本論 5.1 を見よ。

[16]A 2.2.24 anekam anyapadārthe // この規則は bahuvrīhi 複合語形成規則であり、どのような数の pada 項目（A 1.4.14）も意味的に連関する pada 項目と、構成要素としての pada 項目の意味と異なる意味を表示するという条件下で複合語を形成し、その複合語が *bahuvrīhi* と呼ばれることを規定している。

[17]Pradīpa on MBh to A 1.4.52 (II.433): dhātuṣu tv āśrīyamāṇeṣu kvacid api karmasambandhadarśanena sārūpyāt ta evaita iti tattvapratyayaviṣayā nākarmakatvena vyapadiśyante / (「しかしながら、動詞語根が［複合語構成要素以外の項目の意味であると］認められる場合には、特定の運用であっても［それが表示する〈行為〉が］〈目的〉と関係することが観察されるならば、同形性 (sārūpya) に基づいて「これらはそれらと同じである」という同一性の知の対象であるから、それら動詞語根は「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」とは呼ばれない」)

[18]Pradīpa on MBh to A 1.4.52 (II.433): akarmakaśabdasya ca dhātavo 'nyapadārthatvenāśrīyante na tv arthāḥ / arthāśrayaṇe hi karmāvivakṣāyām arthasyākarmakavyapadeśaḥ syāt / (「さらに、*akarmaka* という語については、[「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」というように、bahuvrīhi 複合語として］動詞語根が複合語構成要素以外の項目の意味 (anyapadārtha) として認められ、[「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない〈行為〉というように動詞語根の］意味が複合語構成要素以外の項目の意味であるとは認められない。実に、［動詞語根の］意味［である〈行為〉］が［複合語構成要素以外の項目の意味であると］認められるならば、〈目的〉が表現しようと意図されない場合、意味［である〈行為〉］は「〈目的〉をもたないもの」(*akarmaka*) と呼ばれることになろう」)

為〉と単なる座〈行為〉は異なるという見解をとれば、後者の座〈行為〉を〈目的〉をもたない〈行為〉と呼ぶことができる。しかしこの場合には、[16]–[19] を A 1.4.52 によって説明することはできない。それらの文において動詞語根が表示するのは時間等の〈目的〉を有する〈行為〉であるからである。一方、座〈行為〉自体は同一であるという見解をとれば、1 の動詞語根の場合と同じ理屈が当てはまる。すなわち、時間という〈目的〉が参与する言語運用があるならば、座〈行為〉はもはや〈目的〉をもたない〈行為〉とは呼ばれ得ない。しかしながら、もし「〈目的〉をもたない〈行為〉」の〈目的〉から時間等の〈目的〉を排除するならば、〈目的〉をもたない座〈行為〉を確立することができるであろう[19]。このカイヤタの解釈は、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」に関する〈目的〉の制限というパタンジャリの考え方を念頭に置いたものである[20]。

2.2. *akarmaka* 解釈 2

akarmaka の第二解釈は以下のとおりである。

「[解釈 2] ある〈目的〉によって、それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根とそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根とがあるとき、そのような〈目的〉によって、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［であるもの、それが当該規則では］*akarmaka* という語によって意図されている。しかし、この［時間等の］〈目的〉によっては、いかなる動詞語根もそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根とはなり得ない」[21]

解釈 2 は、ひとつの〈目的〉に関してそれを〈目的〉として有する〈行為〉を表示する動詞語根とそれを〈目的〉としてもたない〈行為〉を表示する動詞語根の二つの動詞語根の存在を想定する。「青い蓮」という表現においては、蓮は青いものであり得るということ、蓮には青い蓮以外に白い蓮もあるということによって蓮に対する「青い」という属性表示が成立する。これと同じように、「x を〈目的〉としてもたない〈行為〉」という表現においては、「x を〈目的〉としてもたない」という〈行為〉に対する限定は、x を〈目的〉としてもたない〈行為〉があり得ること、x を〈目的〉として有する〈行為〉があることによって意味をなす。パタンジャリは、時間等の〈目的〉に関して、それを有する〈行為〉を表示する動詞語根とそれをもたない〈行為〉を表示する動詞語根という区別を設定することはできないと考える。パタンジャリによれば、いかなる動詞語根も時間等の〈目的〉を有する〈行為〉を表示する動詞語根である。したがって、時間等の〈目的〉に相関しては「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」が成立する余地はない。カイヤタは次

[19]Pradīpa on MBh to A 1.4.52 (II.433): arthās tu kārakādibhedād bhinnā evety anye sakarmakā anya evākarmakā iti syād vyapadeśaḥ / yadā tv arthasyāpi svato nāsti bheda iti darśanaṃ tadārtheṣv apy anyapadārtheṣv adoṣaḥ /（「一方、［動詞語根の］意味［である〈行為〉］は、kāraka 等の違いに応じてまさに差別化されるから、〈目的〉を有する［意味（〈行為〉）］と〈目的〉をもたない［意味（〈行為〉）］はまったく異なるから、［〈目的〉をもたない意味（〈行為〉）に関して「〈目的〉をもたないもの」］と呼ぶことが可能となろう。しかし、意味［である〈行為〉］もそれ自体は異ならないという見解をとるならば、意味［である〈行為〉を］複合語構成要素以外の項目の意味であると認めたとしても何ら問題はない」）

[20]カイヤタは A 2.3.5 に対する Bhāṣya を注釈する際には次のように述べている。趣旨は同じである。Pradīpa on MBh to A 2.3.5 (II. 776): na ca kecid iti / yady api kriyāmātrapratipādane kālādīnām abhāvāt tadabhāvanibandhanam api saṃbhavaty akarmakatvaṃ tathāpi dhātūnām anyapadārthatvenāśrayaṇāt teṣāṃ prayogāntare tadarthānām eva kālādisambandhadarśanāt tair akarmatvāsambhavāt sāmārthyād viśeṣāṅgīkaraṇam iti dravyakarmaṇākarmatvaṃ vijñāyata ity arthaḥ / kvacid iti / dravya ity arthaḥ /（「たとえ〈行為〉のみが理解せしめられるときには、時間などは存在しないから、それら［時間等の］非存在に依拠しても表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であるということが可能であるとしても、動詞語根が［*akarmaka* という bahuvrīhi 複合語の］複合語構成要素以外の項目の意味として認められるから、それら［動詞語根］が別の運用においてはまさにその同じ意味をもって時間等と関係することが観察されるから、それら［時間等］によってそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であることはあり得ない。したがって［A 1.4.52 中の *akarmakāṇām* の］言明効力に基づき、［それら時間等とは］異なるもの（viśeṣa）が［「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」が意図する〈目的〉であること］が認められる。したがって実体〈目的〉によってそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であることが理解される。『特定の場合に』とは『［〈目的〉が］実体である場合に』という意味である」）

[21]MBh on A 1.4.52 (I.338.7–8): athavā yena karmaṇā sakarmakāś cākarmakāś ca bhavanti tenākarmakāṇāṃ na caitena karmaṇā kaścid apy akarmakaḥ //

のように説明している。

「限定可能性（sambhava）と逸脱性（vyabhicāra）に基づいて限定関係（viśeṣaṇaviśeṣyabhāva）が成立する場合、いかなる場合にも時間等はたとえ表現しようと意図されなくても現実には存在するから、それら［時間等］によってはいかなる動詞語根もそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根となることはない、という意味である」[22]

2.3. *akarmaka* 解釈 3

パタンジャリによる *akarmaka* の第三解釈は以下のとおりである。

「［解釈 3］ある〈目的〉に存在するときと存在しないときがある場合、そのような〈目的〉によってそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［であるもの、それが当該規則では *akarmaka* という語によって意図されている］。しかし、この［時間等の］〈目的〉は特定の場合には存在しないということはない」[23]

以下の文を見よ。

[20] *odanaṃ pacati*（「彼は粥を煮ている」）
[21] *śete*（「彼は寝ている」）
[22] *māsaṃ pacati*（「彼は一ヶ月の間ずっと煮ている」）
[23] *māsaṃ śete*（「彼は一ヶ月の間ずっと寝ている」）

[20] における粥という〈目的〉は [21] においては存在しない。一方時間月という〈目的〉は [22] と [23] において存在する。このことは時間という〈目的〉は〈行為〉の限定者としていかなる〈行為〉とも関係することを示唆する。カイヤタは次のように述べている。

「［A 1.4.52 中の］*akarmaka*（「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」）という明言によって否定されている〈目的〉は、内的な実体〈目的〉であって、外的な時間等の〈目的〉ではない。すなわち、〈行為〉は先に実体〈目的〉と関係し、その後時間等［の〈目的〉］と［〈行為〉の］分量の画定のために関係する」[24]

したがって解釈 3 によれば、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」における〈目的〉とは、特定の〈行為〉に参与し得るものでありかつ他の〈行為〉には参与し得ないものである。このような〈目的〉は実体〈目的〉である。解釈 3 によっても、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」とはそれが表示する〈行為〉が実体〈目的〉をもたない動詞語根である。

3. A 2.3.5

3.1 A 2.3.5 は以下のような規則である。

[22] Pradīpa on MBh to A 1.4.52 (II.434): saṃbhava-vyabhicārābhyāṃ viśeṣaṇaviśeṣyabhāve sarvatra vastu-sthityāvivakṣitā api kālādayaḥ santīti na taiḥ kecid akarmakā ity arthaḥ / カイヤタは A 2.3.5 に対する Bhāṣya の注釈においては次のように注解している。Pradīpa on MBh to A 2.3.5 (II.776): antaraṅgatvād dravya-karmaṇo bahiraṅgasya kālādes tirobhāvāt tadapekṣaḥ sakarmakākarmakavyapadeśo na pravartata ity arthaḥ / yatra tv antaraṅgasyāsannidhis tatra kālādinimittaḥ sakarmaka-vyapadeśo bhavaty evety āsyate māsa iti karmaṇi lakāro bhavati /（「実体〈目的〉は内的であるから、外的な時間等は姿を隠すから、その［時間等］を期待して「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」という呼称は起こらない。一方、内的な［〈目的〉］が現にないところでは、時間等［の外的〈目的〉］を根拠に「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」という呼称がまさに起こる。したがって〈目的〉を表示するために *l* 接辞が起こる」）ここではカイヤタは内的（antaraṅga）〈目的〉と外的（bahiraṅga）〈目的〉という概念を導入している。実体〈目的〉が内的〈目的〉であり、時間等の〈目的〉が外的〈目的〉である。外的〈目的〉を考慮するならば、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」と「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」の区別は成立しないということの根拠はまさにパタンジャリが指摘する如何なる動詞語根も時間等の〈目的〉を有する〈行為〉を表示する動詞語根であるということである。内的〈目的〉と外的〈目的〉については本論 5.1 を見よ。

[23] MBh on A 1.4.52 (I.338.9): athavā yat karma bhavati na ca bhavati tenākarmakāṇāṃ na caitat karma kvacid api na bhavati //

[24] Pradīpa on MBh to A 1.4.52 (II.434): akarmaka-śrutyāntaraṅgaṃ dravyakarma niṣiddhyate, na bahiraṅgaṃ kālādikarma / tathā hi—pūrvaṃ kriyāyā dravyakarmaṇā saha sambandho bhavati paścāt kālādibhiḥ parimāṇa-nirdhāraṇāya / カイヤタは A 2.3.5 に対する Bhāṣya に関しては次のように述べるだけである。Pradīpa on MBh to A 2.3.5 (II.776): sambhavavyabhicārābhyāṃ viśeṣaṇaviśeṣyabhāvāt /（「可能性と逸脱性に基づいて限定関係が成立するから」）

A 2.3.5 kālādhvanor atyantasaṃyoge //

「[属性（guṇa）・〈行為〉・実体の] 時間（kāla）・道のり（adhvan）との不断の結合（atyantasaṃyoga）が理解さるべきとき、時間・道のりを表示する項目の後に第二格接辞が生起する」[25]

Kāśikāvṛtti は以下のような例文を上げている。

[24] *māsaṃ kalyāṇī*（「一ヶ月の間ずっと幸福である［女］」）
[25] *māsam adhīte*（「彼は一ヶ月の間ずっとヴェーダ聖典の学習をしている」）
[26] *māsaṃ guḍadhānāḥ*（「一ヶ月の間ずっと糖蜜つきの穀物がある」）
[27] *krośaṃ kuṭilā nadī*（「一クローシャの距離にわたりずっと曲りくねっている河」）
[28] *krośam adhīte*（「彼は一クローシャ行く間ずっとヴェーダ聖典の学習をしている」）
[29] *krośaṃ parvataḥ*（「一クローシャの距離の広がりの山」）

この規則に対して以下の vārttika が述べられている。

Vt. 1: atyantasaṃyoge karmaval lādyartham //

「『[時間・道のりの〈行為〉との] 不断の結合が理解されるべきとき、時間・道のりは〈目的〉とみなされる』と定式化されるべきである。*l* 接辞等によって表示されるように」

パタンジャリは、この vārttika によって以下の文が説明されるとする。

[30] *āsyate māsaḥ*（「一ヶ月が座って過ごされる」）
[31] *śayyate krośaḥ*（「一クローシャが眠っている間に過ぎる」）
[32] *āsyate māsam*（「[彼は] 一ヶ月の間ずっと座っている」）
[33] *śayyate krośam*（「[彼は] 一クローシャ行く間ずっと眠っている」）

āsyate、*śayyate* の *l* 接辞に代置される定動詞接辞-*te* は、[30]–[31] においては〈目的〉を表示し、[32]–[33] においては〈行為〉（bhāva）を表示する[26]。パタンジャリによれば、あるものが「x とみなされる」（x-vat）とき、そのものはそれ自身の本来的在り方を放棄しない[27]。よって [32]–[33] では、動詞語根*ās* と*śī*は本来的な「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」という在り方を放棄しない。したがって、[32]–[33] における*āsyate*、*śayyate* の *l* 接辞に代置される定動詞接辞-*te* は〈行為〉（bhāva）を表示する。

3.2 パタンジャリはこのカーティアーヤナの提案を以下のような議論を通じて退ける。

［論点 1］[30]–[31] における時間月と道のりクローシャは、*kaṭaṃ karoti*（「彼はマットを作っている」）、*śakaṭaṃ karoti*（「彼は荷車を作っている」）におけるマットや荷車と同様本来的な〈目的〉（prākṛtakarman）である[28]。
［反論］〈行為〉がもたらす特性（kriyākṛtaviśeṣa）が現認されるものが〈目的〉であり、時間月や道のりクローシャにはそれは観察されないから、それらを本来的な〈目的〉とみなすことはできない[29]。
［答論］この論理を受け入れれば、*ādityaṃ paśyati*（「彼は太陽を見ている」）、*himavantaṃ śṛṇoti*（「彼はヒマーラヤ山について聞く」）、*grāmaṃ gacchati*（「彼は村に行く」）における太陽等も〈目的〉でないことになる。よって [30]–[31] における時間月と道のりクローシャは本来的な〈目的〉とみなされるべきである[30]。

[25] KV on A 2.3.5: kālaśabdebhyo 'dhvaśabdebhyaś ca dvitīyā vibhaktir bhavati atyantasaṃyoge gamyamāne / kriyāguṇadravyaiḥ sākalyena kālādhvanoḥ sambandhaḥ atyantasaṃyogaḥ /

[26] A 3.4.69 laḥ karmaṇi cākarmakebhyaḥ // 本論 1.1 を見よ。

[27] MBh on A 2.3.5 (I.445.14–15: atha vatkaraṇaṃ kimartham / svāśrayam api yathā syāt /

[28] カイヤタは次のように説明している。Pradīpa on MBh to A 2.3.5 (II.775): sakarmakavyāpanādidhātvarthāṅge āsanādāv āsyādīnāṃ vartanāt svābhāvikam etat karmety arthaḥ /（「〈目的〉を有する〈遍充〉〈行為〉等の動詞語根の意味を従属要素とする座〈行為〉等を動詞語根*ās* 等は表示するから、これら［時間等］は［対象表示の］本性に基づく（svābhāvika）〈目的〉である、という意味である」）

[29]「〈行為〉がもたらす特性」という考え方については小川 [2011: 48–50] を見よ。

[30] MBh on A 2.3.5 (I.445.17–20): prākṛtam evaitat karma yathā kaṭaṃ karoti śakaṭaṃ karotīti // evaṃ manyate / yatra kaścit kriyākṛto viśeṣa upajāyate tan nyāyyaṃ karmeti / na

[論点2] この解決法では、[32]–[33] が説明できない。なぜなら、この解決法では動詞語根*ās*、*śī*はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根となり、A 3.4.69 が規定するそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根への〈行為〉(bhāva) 表示のための *l* 接辞の導入が不可能となるからである。

[難点回避] A 1.4.52 に対する Bhāṣya が提示する「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」の解釈の論理により、動詞語根*ās*、*śī* は、時間と道のりという〈目的〉を有する〈行為〉を表示する点において「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」であるとしても、実体〈目的〉を〈目的〉としてもたない〈行為〉を表示する点において「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」である。すなわち、これらの動詞語根は「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」の定義を満たす。よって [32]–[33] における〈行為〉(bhāva) を表示する *l* 接辞の導入は正当化される[31]。

このようにパタンジャリによれば、vārttika の提案を考慮することなく、[32]–[33] は説明可能である。

3.2 Kāśikāvṛtti は A 2.3.5 の適用領域に〈行為〉を含めている（[25]、[28]）。これに対してカーティアーヤナ、パタンジャリが〈行為〉をその適用領域から除外していることは明らかである。パタンジャリは次のように明言している。

「[時間・道のりの]〈行為〉との不断の結合の事例とは異なる事例のために［A 2.3.5 は定式化されるべきである]」[32]

そしてパタンジャリは以下の例を挙げる。

[27] *krośaṃ kuṭilā nadī*（「一クローシャの距離にわたって曲がりくねっている河」）

[34] *krośaṃ ramaṇīyā vanarājiḥ*（「一クローシャにわたって美しい並木」）[33]

パタンジャリがここで挙げている例文はすべて属性の道のりとの不断の結合を表現している[34]。

4. VP 3.7.67

4.1 パタンジャリは、A 2.3.5 に対する Bhāṣya において時間等の〈目的〉を「本来的な〈目的〉」とみなす見解を提示した。バルトリハリが VP 3.7.67 において説明しようとしているのはまさにこの見解である。

バルトリハリによれば、[3]–[6] における動詞語根*ās* 等は座〈行為〉等に加えてそれに対する従属要素としての〈遍充〉という〈行為〉を内包している (antarbhūta)。この内包された〈遍充〉〈行為〉に相関して時間等は〈目的〉となる。この場合、時間等は以下の規則によって〈目的〉と呼ばれる。

A 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma //

「〈行為主体〉が［自己の〈行為〉を通じて］最も得ようと欲する kāraka は〈目的〉と呼ばれる」[35]

---

ceha kaścit kriyākṛto viśeṣa upajāyate // naivaṃ śakyam / ihāpi na syāt / ādityaṃ paśyati / himavantaṃ śṛṇoti / grāmaṃ gacchati / tasmāt prākṛtam evaitat karma yathā kaṭaṃ karoti śakaṭaṃ karotīti //

[31]MBh on A 2.3.5 (I.445.21–446.2): yadi tarhi prākṛtam evaitat karmākarmakāṇāṃ bhāve lo bhavatīti bhāve lo na prāpnoti / āsyate māsaṃ devadatteneti // tat tarhi vaktavyam / na vaktavyam / akarmakāṇām ity ucyate na ca kecit kālabhāvādhvabhir akarmakāḥ / ta evaṃ vijñāsyāmaḥ / kvacid ye 'karmakā iti // athavā yena karmaṇā sakarmakāś cākarmakāś ca bhavanti tenākarmakāṇāṃ na caitena karmaṇā kaścid apy akarmakaḥ // athavā yat karma bhavati na ca bhavati tenākarmakāṇāṃ na caitat karma kvacid api na bhavati //

[32]MBh on A 2.3.5 (I.336.3–4): yatrākriyayātyantasaṃyogas tadartham /

[33]なお、カイヤタは A 1.4.51 に対する ślokavārttika 14–15 を説明する際に A 2.3.5 との関連から次のような反論があり得ることを述べている。Pradīpa on MBh to A 1.4.51 (II.425): nanu kālādhvanor iti dvitīyā siddher iti kiṃ karmasaṃjñayā / godohādīnāṃ kālatvenāprasiddhatvād dvitīyā na prāpnotīti bhāvasya tāvat karmasaṃjñā vidheyā /（「[反論] A 2.3.5 kālādhvanor atyantasaṃyoge によって、時間表示語、道のり表示語の後に第二格接辞が生起することが確立されるから、当該の語の表示対象に〈目的〉という術語を付与することは無意味である。[一方、] 牛の搾乳等は時間としては周知されていないから、それらの行為 (bhāva) を表示する語の後に第二格接辞は結果しない。したがって、まずもって行為 (bhāva) が〈目的〉と呼ばれることが規定されるべきである」）

[34]Pradīpa on MBh to A 2.3.5 (II.777): guṇenātrātyantasaṃyogo na tu kriyayeti karmatvābhāvaḥ /

[35]この規則の解釈については小川 [2008: 25–26] を見よ。

ヘーラーラージャによれば、例えば [3] は次のように言い換え可能である。

[35] *māsaṃ vyāpyāste*（「彼は一ヶ月を遍充して座っている」）

[36] *māsam āsanayā vyāpnoti*（「彼は一ヶ月を座〈行為〉によって遍充している」）[36]

ヘーラーラージャによれば時間等は〈遍充〉〈行為〉に相関した〈到達対象〉(prāpya) であり、それに固有な〈ハタラキ〉は対象性の獲得 (viṣayabhāvopagama) である[37]。

なお、以下の文においては動詞語根*ās* は〈遍充〉〈行為〉を表示しない。

[37] *kaṭe āste*（「彼はマットに座っている」）

バルトリハリは、同形の動詞語根が、ある場合には x を従属要素とする y を表示し、またある場合には x だけあるいは y だけを表示することを次のように述べている。

VP 3.7.58: ekadeśe samūhe vā vyāpārāṇāṃ pacādayaḥ /
svabhāvataḥ pravartante tulyarūpasamanvitāḥ //

「*pac* 等［の動詞語根］は、同じ語形を具えている限り［単一なるものであり、対象表示の］本性 (svabhāva) に基づいて、一部の〈ハタラキ〉と〈ハタラキ〉の集合の両者を表示する」[38]

動詞語根*ās* は [3] においては〈遍充〉〈行為〉を従属要素とする座〈行為〉を表示し、[37] においては座〈行為〉のみを表示する。

それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根の場合も同様である。

[38] *māsam odanaṃ pacati*（「彼は一ヶ月の間ずっと粥を煮ている」）

この文の場合は、動詞語根 *pac* に〈遍充〉を従属要素とする煮る〈行為〉を意味として想定することができる。すなわち、この文から「彼は一ヶ月を遍充して粥を煮る〈行為〉を遂行している」という意味が理解されるとするならば、時間月をその〈遍充〉の〈行為〉に相関した〈目的〉とみなすことができる[39]。

バルトリハリが言うところの、時間等の動詞語根が意味として内包する〈行為〉に相関した〈目的〉たる在り方 (karmatva) とは、パタンジャリの言葉で言えば、「本来的な」(prākṛta)〈目的〉たる在り方である。

4.2 なお、すでに述べたように、A 1.4.51 に対するślokavārttika 14–15 は、[3]–[6] において時間月等が A 1.4.51 によって〈目的〉という術語を付与されることを述べている[40]。ヘーラーラージャも同趣旨のことを述べている[41]。[3]–[6] において時間月等が A 1.4.51 によって〈目

[36] カイヤタも同様の言い換えをしている。Pradīpa on MBh to A 1.4.51 (II.425): yadā tv aṅgīkṛtasakarmakadhātvantarārthe āsanādāv āsyādayo vartante tadā pūrveṇaiva karmatvaṃ siddham / tathā hi—māsam āsta ity asyāyam arthaḥ—māsam āsanena vyāpnotīti / tathā ca vakṣyati—prākṛtam evedaṃ karma yathā kaṭaṃ karotīti / atra darśane na kevalam akarmakāṇāṃ kālādayaḥ karmatvaṃ pratipadyante api tu sakarmakāṇāṃ api nyāyasya tulyatvāt /（「しかしながら、〈目的〉を有する別の動詞語根の意味を受け入れている座〈行為〉等を動詞語根*ās* 等が表示する場合には、まさに先行の規則［A 1.4.49］によってそれらが〈目的〉と呼ばれることは確立される。すなわち、*māsam āste*（「彼は一ヶ月の間ずっと座っている」）というこの文は「一ヶ月を座〈行為〉によって遍充している」という意味である。そしてそのことを［パタンジャリは A 2.3.5 に対する Bhāṣya において］『これら［時間等］は、*kaṭaṃ karoti*（「彼はマットを作っている」）［におけるマットと］同様、本来的な〈目的〉である』と述べるであろう。この見解では、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根ばかりでなく、それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根の場合も時間等は〈目的〉と呼ばれることが理解される。同じ論理が当てはまるからである」）

カイヤタは A 2.3.5 に対する Bhāṣya を注釈する際にも次のように述べている。Pradīpa on MBh to A 2.3.5: tataś ca māsam āste ity asya māsam āsanena vyāpnotiīty arthaḥ / niyatatvāc ca prayogasya kaṭa āsta ityādau āsanamātre 'naṅgīkṛtakriyāntare āsir vartata iti atiprasaṅgo nodbhāvanīyaḥ /（「そしてそれ故、*māsam āste*（「彼は一ヶ月の間ずっと座っている」）というこの文は「彼は一ヶ月を座〈行為〉によって遍充している」という意味である。言語使用は［領域が］制限されるから、*kaṭa āste*（「彼はマットに座っている」）等においては、動詞語根*ās* は別の〈行為〉を受け入れていない座〈行為〉のみを表示するから、過大適用は指摘さるべきではない」）

なお、[36] の言い換えが要請されるのは、[30]–[31] のような受動構文を説明するためである。本論 6 を見よ。

[37] VP 3.7.67.15 を見よ。

[38] 本詩節の解釈については小川 [2009: 30–33] を見よ。なお、ヘーラーラージャは VP 3.7.67 を注釈する際にこの詩節を引用している。VP 3.7.67.18 を見よ。

[39] ヘーラーラージャは、VP 3.7.67 中の *sarvaiḥ*をすべての動詞語根を指示すると解する。VP 3.7.67.13 を見よ。

[40] 本論 1.2 を見よ。

[41] VP 3.7.68.7–8 を見よ。

的〉という術語を付与されるという見解は以下のように説明される。

[3] においても [37] におけると同じように動詞語根*ās* は座〈行為〉のみを表示するとしよう。この場合 [3] は時間月を〈基体〉として表現した以下の文と同じ意味となる。

[39] *māse āste*（「彼は一ヶ月間座る」）

考慮される規則は以下の規則である。

A 1.4.45 ādhāro 'dhikaraṇam //

「＜行為主体＞あるいは〈目的〉を通じて、それらに存する〈行為〉の基体（ādhāra）である kāraka は＜基体＞（*adhikaraṇa*）と呼ばれる」

[39] においては〈行為主体〉が一ヶ月の間ずっと座っていることは意図されない。座〈行為〉が一ヶ月という時間に限定されることだけが意図される。この場合 [3] においては、一ヶ月は〈基体〉という特定の kāraka として表現しようと意図されないものとして A 1.4.51 によって〈目的〉という術語を付与される[42]。

このように動詞語根*ās* の意味として座〈行為〉のみを想定する場合には、時間月に対して〈目的〉という術語を付与する術語規則は A 1.4.51 である。

5. VP 3.7.68

5.1. dravyakarman

バルトリハリは、VP 3.7.68 において「実体〈目的〉」（*dravyakarman*）という表現を用いている。この表現はバルトリハリに固有な表現である。周知のようにバルトリハリはパタンジャリが kāraka を実体と属性の枠組みで解釈するのを承けて、kāraka を能力として定義した[43]。このことを考慮するならば、バルトリハリは能力としての〈目的〉と区別するために、〈目的〉として機能する能力を有する、その能力の保持者である実体を指してこの表現を使用していると考えることができる。ここで重要なのは〈基体〉の概念である。バルトリハリは A 1.4.45 が規定する〈基体〉（adhikaraṇa）について次のように述べている。

VP3.7.148: kartṛkarmavyavahitām asākṣād dhārayat kriyām /
upakurvat kriyāsiddhau śāstre 'dhikaraṇaṃ smṛtam //

「[kāraka が]〈行為主体〉と〈目的〉に介在されて間接的に〈行為〉を保持するとき、[その kāraka は]〈行為〉の実現を扶助するものであるから、文法学においては「〈基体〉」（*adhikaraṇa*）と伝統的に呼ばれている」

次の文を見よ。

[37] *kaṭe āste*（「彼はマットに座っている」）
[40] *sthālyām odanaṃ pacati*（「彼は鍋のなかの粥を煮ている」）

マットは座〈行為〉に相関した〈基体〉である。鍋は料理〈行為〉に相関した〈基体〉である。マットは〈行為主体〉を保持することによって、鍋は〈目的〉を保持することによって、〈行為主体〉、〈目的〉に内属する〈行為〉の実現を扶助する[44]。〈行為〉は能力としての〈行為主体〉、〈目的〉には内属し得ない。このように、バルトリハリは「実体〈目的〉」という表現によって、時間等の〈基体〉によって保持される、〈行為〉の基体としての〈実体〉である〈目的〉を意図しているのである。したがって、実体〈目的〉とは、時間や場所等に対して能依所依の関係（ādhārādheyabhāva）にある実体としての〈目的〉ということになる。バルトリハリが時間、行為（bhāva）、道のり、国土という〈目的〉と

[42] パタンジャリは、A 1.4.51 の適用領域において kāraka が〈基体〉として表現しようと意図されない例として以下の文を挙げる。*anvavaruṇaddhi gāṃ vrajam*（「牛を牛小屋に閉じ込めろ」*vrajam*, acc. sg. m.）カイヤタによれば、この文は「牛をして牛小屋に入らせる」（gavā vrajaṃ praveśayati）という意味であり、「牛を牛小屋に留まらせる」（gavāṃ vraje sthāpayati）ことを意味する。この留まらせる〈行為〉に対して牛小屋は〈基体〉である。Pradīpa on MBh to A 1.4.51 (II.416): gaur vrajaṃ praviśati gavā vrajaṃ pravel'sayatīty arthaḥ / ...gāṃ vraje sthāpayatīti sampratyayād vrajasya sthānakriyāpekṣam ādhāratvam /

[43] VP 3.7.1 を見よ。小川 [2000: 547–548] はこの詩節を詳論している。

[44] Prakāśa on VP 3.7.148: kaṭe āste sthālyāṃ pacatīti kartṛkarmadhāraṇāt tatsamavetāyāṃ kriyāyām upakārakam adhikaraṇaṃ pāramparyeṇa /

区別してこの表現を使用していることに留意しなければならない。

5.2. 〈場〉

バルトリハリは、時間等は〈場〉(ādhāra) であると述べる。ヘーラーラージャによれば二つの解釈が可能である[45]。

(1) それら時間等は、鍋等の〈基体〉が実体〈目的〉である粥等に対して〈場〉(ādhāra) となるように、実体〈目的〉に対して〈場〉となる。

(2) それら時間等は、鍋等が実体〈目的〉を通じて煮る〈行為〉に対する〈場〉となるように、実体〈目的〉があるとき、それを通じて〈行為〉に対する〈場〉となる。

重要なのは、いずれの解釈をとるにしても [3]–[6] における時間等が〈遍充〉〈行為〉を従属要素とする座〈行為〉等に相関して〈基体〉と呼ばれ得るものであることである。例えば一ヶ月という一定量の時間は〈行為主体〉を保持することによって座〈行為〉の〈基体〉となり、一定量の道のりを行くとき、一定の広さの国土を行くとき、道や国土の各地点も〈行為主体〉を保持することによって座〈行為〉の〈基体〉となる。しかし、この〈基体〉として機能する時間等は、〈遍充〉〈行為〉に相関しては〈目的〉となる。これが VP 3.7.68 の第一のポイントである。

5.3. 内的〈目的〉と外的〈目的〉

バルトリハリは VP 3.7.68 において時間等の〈目的〉たる在り方 (karmatva) は実体〈目的〉のそれとは地位を異にする (bhinnakakṣya) と述べる。バルトリハリによれば、この地位の違いは〈目的〉として〈行為〉に関係する順序の先後関係によるものである。〈行為〉に対して実体〈目的〉と時間等の〈目的〉が参与するとき、〈行為〉は先ず実体〈目的〉に関係し、その関係の成立後に (uttaram) 時間等の〈目的〉と関係する。次の文を見よ。

[40] *sthālyām odanaṃ pacati*（「彼は鍋の中の粥を煮ている」）

[41] *māsaṃ sthālyām odanaṃ pacati*（「彼は鍋の中の粥を一ヶ月の間ずっと煮ている」）

鍋は、実体〈目的〉である粥を保持する〈ハタラキ〉を通じて煮る〈行為〉の〈基体〉となっている。[40] を前提として [41] が成立することは明らかである。鍋の中の粥を煮る〈行為〉を他の鍋の中の粥を煮る〈行為〉から区別するために、前者の煮る〈行為〉を一ヶ月継続するものとして限定するのが [41] の文である。

ヘーラーラージャは、〈行為〉との関係に関する実体〈目的〉の時間という〈目的〉に対する先行性を説明するために以下の詩節を引用している。

śaktipramāṇasaṅkhyāder dravyadharmād viśiṣyate /
kriyāsu kālayogo 'taḥ prāg yogo dravyakarmaṇā //

「実体の属性である能力、分量、数等によって時間の〈行為〉との結合は差別化される (viśiṣyate)。したがって、[〈行為〉は] 先に実体〈目的〉と結合する」[46]

実体〈目的〉の〈行為〉を実現する能力、分量、数によって〈行為〉の実現に要する時間に違いがある。煮る〈行為〉でも、堅いものを煮る場合と軟らかいものを煮る場合では要する時間は異なるし、分量の多いものを煮る場合と少ないものを煮る場合でも要する時間は異なる。さらに、一本の人参を煮るのと二本の人参を煮るのとでは煮る時間は異なる。

なお、カイヤタも A 1.4.52 に対する Bhāṣya の注釈においてb句に違いが見られる同詩節を引用している。

śaktipramāṇasaṃkhyāder dravyadharmāt pravartate /
kriyāsu kālayogo 'taḥ prāgyogo dravyakarmaṇā //

「実体の属性である能力、分量、数等から、〈行為〉に時間との結合が起こる (pravartate)。したがって、[〈行為〉は] 先に実体〈目的〉と結合する。」

ナーゲーシャによれば、木等の発芽の能力に従って発芽〈行為〉は春という時間と結合し、長いものを噛む〈行為〉は、ダンダ時間等の時間と結合し、多数のものを煮る〈行為〉は少数

[45] VP 3.7.68.1 を見よ。

[46] VP 3.7.68.4 を見よ。

のものを煮る〈行為〉に比してより多くの時間と結合する[47]。

〈行為〉を差別化するのは時間である[48]。行為（bhāva）も、道のりも、国土も、それによって意図されているのは、〈行為〉の完遂に要する一定量の時間、ある道のりを踏破するに要する時間、ある国土を踏破するに要する時間であることに留意しなければならない[49]。

プッララージャによれば、〈目的〉には内的なもの（antaraṅga）と外的なもの（bahiraṅga）があり、実体〈目的〉は前者、時間等という〈目的〉は後者である[50]。ヘーラーラージャによれば、内的な〈目的〉は直接的に〈行為〉の実現を扶助する点で内的であり、外的〈目的〉は実現されるべき〈行為〉の差別化に資するという点で外的である[51]。

6. VP 3.7.69

時間等の〈目的〉と実体〈目的〉が共表現される [38] と意味的に等価な以下の文が派生可能である。

[42] *māsam odanaḥ pacyate*（「一ヶ月の間ずっと粥が煮られている」）

この文においては *pacyate* の *l* 接辞の代置要素-*te* は〈目的〉を表示する。この〈目的〉は実体〈目的〉としての粥である。

A 1.4.51 に対するślokavārttika 8 は、〈目的〉を二つ有する〈行為〉を表示する動詞語根の場合に受動構文で *l* 接辞が表示するのは、二つの〈目的〉のうち主要性が認められる〈目的〉の方であることを述べている。

Ślokavārttika 8: pradhānakarmaṇy ākhyeye lādīn āhur dvikarmaṇām //

「〈目的〉を二つ有する〈行為〉を表示する動詞語根の場合、〈目的〉が表示されるべきとき、主要〈目的〉の表示のために *l* 接辞等は起こると［文法家達］は言う」

パタンジャリは以下の例文を挙げる。

[43] *ajāṃ nayati grāmam*（「彼は雌ヤギを村に連れて行く」）

[44] *ajā nīyate grāmam*（「雌ヤギが村に連れて行かれる」）

[45] *ajā nītā grāmam*（「雌ヤギが村に連れて行かれた」）

動詞語根 *nī*（「連れて行く」）は、二つの〈目的〉を有する動詞語根である。[44] では定動詞接辞-*te* は〈目的〉を表示し、その〈目的〉は主要〈目的〉である雌ヤギである。[45] においては kṛt 接辞 ***kta*** が雌ヤギという主要〈目的〉を指示している。したがってślokavārttika 8 に基づけば、以下の文が成立する。

[38] *māsaṃ odanaṃ pacati*（「彼は一ヶ月の間ずっと粥を煮ている」）

[42] *māsaṃ odanaḥ pacyate*（「粥が一ヶ月の間ずっと煮られている」）

バルトリハリは本詩節において、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根である*ās* 等が時間等の〈目的〉を表示する項目と共に使用される [30]–[33] の文を考察対象としている。それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根の時間等の〈目的〉を表示する項目との共表現においては、[30]–[31] におけるように *l* 接辞が時間等の〈目的〉を指示すること、[32]–[33] のように *l* 接辞が〈行為〉（bhāva）を表示することが可能である。

[30]–[31] においては、動詞語根*ās*、*śī*はそれぞれ座〈行為〉に限定された〈遍充〉〈行為〉、寝〈行為〉に限定された〈遍充〉〈行為〉を表示し、それらの〈遍充〉の〈行為〉に相関して、時間月、道のりクローシャは〈目的〉とみなされる。よってそれらの〈目的〉を表示する *l* 接辞が当該の動詞語根の後に導入される[52]。

一方、[32]–[33] においては、これらの動詞語根はそれぞれ〈遍充〉〈行為〉に限定された

[47] Uddyota on MBh to A 1.4.52 (II.434): tatra śakter yathā vasantādikālayogaḥ pallavajanmādeḥ / pramāṇavaśād yathā dīrghaśaṣkulyādicavarṇasya daṇḍādikālayogaḥ / saṅkhyāvaśād yathā nānādravyakarmakapākasya /

[48] VP 3.9.2: diṣṭiprasthasuvarṇādi mūrtibhedāya kalpate / kriyābhedāya kālas tu saṃkhyā sarvasya bhedikā // バルトリハリによれば、長さ等の尺度は空間的延長性のある物体（mūrti）を差別化し、時間は〈行為〉を差別化し、数は物体と非物体のいずれも差別化する。

[49] 注 8 および VP 3.7.67.11–12 を見よ。

[50] VP 3.7.67.8 を見よ。

[51] VP 3.7.69.14 を見よ。

[52] 注 36 を見よ。

座〈行為〉、〈遍充〉〈行為〉に限定された寝〈行為〉を表示する。まず、座〈行為〉、寝〈行為〉そのものを考慮することによって当該の動詞語根はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉（実体〈目的〉）をもたない動詞語根として確定され、〈行為〉（bhāva）を表示する *l* 接辞が導入される。次に、それらの動詞語根が表示する座〈行為〉、寝〈行為〉の画定のために、〈遍充〉〈行為〉が考慮される。したがって、その〈遍充〉〈行為〉に相関して時間月と道のりクローシャは〈目的〉とみなされ、*māsa*、*krośa* の後に第二格接辞が導入される。

パタンジャリ、バルトリハリは、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」と「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」における〈目的〉を実体〈目的〉に限定し、*ās*、*śī* のように「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」として一般的に確立されている動詞語根を他動詞化、自動詞化する意味論に依拠し、時間等の〈目的〉に実体〈目的〉の可能性と非実体〈目的〉の可能性という二つの可能性を認めているのである。

VP3.7.67–69 注釈和訳研究

*ヘーラーラージャの注釈 Prakāśa には部分的に欠落があり、プッララージャがその欠落を埋める形で補作している。区別が必要と思われる部分では特記している。特記されていない部分はヘーラーラージャによる注釈である。定本としたのは Iyer [1963] である。

VP 3.7.67

[VP 3.7.67.0 (Phullarāja)] tatrākathitasūtre—

kālabhāvādhvagantavyāḥ karmasaṃjñā hy akarmaṇām / deśaś ca /

ity uktaṃ tāvad anārambhaṇīyam iti pratipādayitum āha /

その［A 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma 以外の〈目的〉定義規則によって説示される〈目的〉の］うち、先ずもって A 1.4.51 akathitaṃ ca に関して述べられた以下のślokavārttika の言明が定式化不要であることを説明するために［バルトリハリは次の詩節を］述べる。

Ślokavārttika 14「実に、『時間、行為（bhāva）、踏破さるべき道のり（adhvagantavya）は、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［が表示する〈行為〉］に関係して〈目的〉と呼ばれる』という追加規定が定式化されるべきである」

Ślokavārttika 15「『さらに、国土（deśa）は、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［が表示する〈行為〉］に関係して〈目的〉と呼ばれる』という追加規定が定式化されるべきである」[53]

VP3.7.67: kālabhāvādhvadeśānām antarbhūta-kriyāntaraiḥ /
sarvair akarmakair yoge karmatvam upajāyate //

「時間（kāla）、行為（bhāva）、道のり（adhvan）、国土（deśa）には、それらがいかなる動詞語根と結合しようと—それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根であろうとそうでなかろうと—、動詞語根が意味として内包している別の〈行為〉によって〈目的〉たる在り方が生まれる」

[53] これらのślokavārttika については本論 1 を見よ。

[VP 3.7.67.1 (Phullarāja)] akarmakāṇāṃ kathaṃ karmaṇā yogaḥ syād iti kālādīnāṃ tatsaṃprayoge karmatvaṃ vaktavyam upajāyate /

[反論]〈目的〉をもたない［〈行為〉を表示する動詞語根］がどうして〈目的〉［を表示する語］と結合し得よう。したがって、時間等［を表示する語］は、それら［〈目的〉をもたない〈行為〉を表示する動詞語根］と結合するとき、その表示対象が〈目的〉と呼ばれるということが定式化されるべきであるという事態が起こる（karmatvaṃ vaktavyam upajāyate）。

[VP 3.7.67.2 (Phullarāja)] atrocyate / nātra karmasaṃjñā vaktavyā yasmāt kālādīnām akarmakair dhātubhir yoge karmatvam upajāyata eva /

[答論] これに対して答えよう。この場合、〈目的〉の術語規定は新規に設定される必要はない。なぜなら、時間等［を表示する語］は、〈目的〉をもたない［〈行為〉を表示する］動詞語根と結合するとき、［それらが表示する時間等が］〈目的〉となるということがまさに起こる（karmatvam upajāyata eva）からである。

[VP 3.7.67.3 (Phullarāja)] katham iti viśeṣayitum āha antarbhūtakriyāntaraiḥ iti / antarbhūtaṃ pradhānakriyāpekṣayā kriyāntaraṃ yeṣām iti te tathā / taiḥ yoge saṃbandhe sati /

どのように［〈目的〉たる在り方が生起するのか］具体的に述べるために［バルトリハリは］「動詞語根が意味として内包している別の〈行為〉によって」（antarbhūtakriyāntaraiḥ）と述べる。

［*antarbhūtakriyāntara* という語は］bahuvrīhi 複合語であり、「内包されている主要〈行為〉に相関した別の〈行為〉（kriyāntara）を表示する［動詞語根］」を意味する。

［*yoge* という第七格形の第七格接辞は satisaptamī であり、］それらと「結合するとき」（yoge sati）すなわちそれらと関係するとき（sambandhe sati）［という意味である］。

[VP 3.7.67.4 (Phullarāja)] ataś ca kriyāntarāpekṣayā teṣāṃ karmatvaṃ siddham eveti kim upasaṅkhyānena /

そしてこのような理由から、それら［時間等］が［動詞語根が意味として内包している］別の〈行為〉に相関して〈目的〉となることがまさに確立されるから、追加規定が何になろう。

[VP 3.7.67.5 (Phullarāja)] tathā ca māsam āste, godoham āste, krośaṃ svapiti, kurūn svapitītyādau māsādīn vyāpyāsta iti vyāptyaṅgāyām āsanādikriyāyāṃ dhātur vṛttaḥ /

そしてそのような場合、*māsam āste*（「彼は一ヶ月の間ずっと座っている」）、*godoham āste*（「彼は牛の乳が搾られる間ずっと座っている」）[54]、*krośaṃ svapiti*（「彼は一クローシャ行く間ずっと眠っている」）、*kurūn svapiti*（「彼はクル国を行く間ずっと眠っている」）等［の文］においては、「彼は一ヶ月等［の時間］を遍充して（vyāpya）座っている」（māsādīn vyāpyāste）というように〈遍充〉（vyāpti）を従属要素とする座〈行為〉等（vyāptyaṅgāyām āsanādikriyāyām）を動詞語根［*ās*（「座る」）］は表示する。

[VP 3.7.67.6 (Phullarāja)] vyāptyādikriyayāptum iṣyamāṇatvāt kālādīnāṃ sphuṭam eva karmatvam iti yatnāntareṇa nārthaḥ /

〈遍充〉等の〈行為〉を通じて獲得しようと［〈行為主体〉によって］望まれるものであるから、時間等が〈目的〉であることはまったく明白である[55]。したがってさらなる［規則定式化の］努力をして何になろう。

[VP 3.7.67.7.1 (Phullarāja)] yady evam idānīm āsiprabhṛtayaḥ kālabhāvādhvakarmabhiḥ sakarmakāḥ sampannāḥ, tataś ca tebhyaḥ kālādiṣv eva karmasu lakṛtyaktakhalarthāḥ prāpnuvanti na bhāve /

［反論］もしこのようなら、今や動詞語根*ās* 等は時間、行為（bhāva）、道のりという〈目的〉によってそれが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根となる。そしてそれゆえ、［それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根ではないから、］それら［の動詞語根］の後に *l* 接辞、kṛtya 接辞、***kta*** 接辞、***khal*** 接辞、***khal*** 接辞の意味を有する接辞は、まさに時間等の〈目的〉が表示されるべきときには結果しても〈行為〉（bāva）が表示されるべきときには結果しない[56]。

---

[54]ナーゲーシャによれば、この文は「牛が搾乳されている限りの時間彼は座っている」ということを意味する。Uddyota on MBh to A 1.4.51 (425): yāvantaṃ kālaṃ gaur duhyate tāvad āste ity arthaḥ / 類似した文として *gopānam āste*（「彼は牛が水を飲む間ずっと座っている」）を挙げることができる。Uddyota on MBh to A 1.4.51 (II.425): gopānam āste ity asya yāvatkālaṃ gāvo jalaṃ pibanti tāvad āste ity arthaḥ /

[55]以下の規則が考慮される。A 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma // 本論 4.1 を見よ。

[56]A 3.4.70 tayor eva kṛtyaktakhalarthāḥ //（「kṛtya 接辞、

[VP 3.7.67.7.2 (Phullarāja)] tatra māsam āsyate devadatteneti bhāve lakāro na syāt / māsam āsitavyam, māsam āsitam, svāsaṃ māsam iti ca kṛtyaktakhalarthā bhāve na syuḥ /

その場合、*māsam āsyate devadattena*（「デーヴァダッタは一ヶ月の間ずっと座っている」）におけるような〈行為〉(bhāva) を表示する *l* 接辞の生起はないことになろう。

さらに、*māsam āsitavyam*（「[デーヴァダッタは] 一ヶ月の間ずっと座っているべきである」）[57]、*māsam āsitam*（「[デーヴァダッタは] 一ヶ月の間ずっと座った」）[58]、*svāsaṃ māsam*（「[デーヴァダッタは] 一ヶ月の間ずっと容易に座っている」）[59]におけるような〈行為〉(bhāva) を表示する kṛtya 接辞、***kta*** 接辞、***khal*** 接辞、***khal*** 接辞の意味を有する接辞の生起はないことになろう。

[VP 3.7.67.7.3 (Phullarāja)] bhāve cākarmakebhyaḥ iti vacanāt tatrāpīṣyate /

[しかし]A 3.4.69 laḥ karmaṇi ca bhāve cākarmakebhyaḥの言明［および A 3.4.70 tayor eva kṛtyaktakhalarthāḥの言明］に基づき、それらの事例においても［〈行為〉(bhāva) を表示するために上記の接辞が生起することが］望ましい。

[VP 3.7.67.7.4 (Phullarāja)] tasmāt kālādikarmasadbhāvād akarmakatvaṃ katham / sakarmakatve bhāve lakāraḥ katham iti /

それゆえ、[*ās* 等の動詞語根は、それらが表示する〈行為〉に] 時間等の〈目的〉が存在するから、どうして〈目的〉をもたない［動詞語根］であり得よう。［さらに］〈目的〉を有する［動詞語根である］ならば、どうして〈行為〉(bhāva) を表示する *l* 接辞［等］が［それらの後に］生起し得よう。

[VP 3.7.67.8 (Phullarāja)] ucyate / dvividhaṃ karma, antaraṅgaṃ bahiraṅgaṃ ca / tatra dravyakarmāntaraṅgam, tenaiva ca pūrvaṃ saṃbandhaḥ / bahiraṅgaṃ kālādilakṣaṇaṃ karma / yad vakṣyate / śaktipramāṇa ityādiślokena /

［答論］以上の反論に答えよう。

〈目的〉には二種ある。内的 (antaraṅga) な〈目的〉と外的 (bahiraṅga) な〈目的〉とである。そのうち内的な〈目的〉は、実体としての〈目的〉である。[〈行為〉は] 先ずまさにその［〈目的〉] と関係する。外的な〈目的〉は、時間等と特徴づけられる〈目的〉である。そのことは*śaktipramāṇa* 云々の詩節によって述べられるであろう[60]。

[VP 3.7.67.9 (Phullarāja)] tatra sakarmakatvākarmakatvavyapadeśo 'ntaraṅgeṇaiva nyāyyaḥ / tathā coktam akarmakāṇām ity ucyata ityādinā bhāṣyeṇa /

その場合、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」(*sakarmaka*)、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」(*akarmaka*) という呼称は、まさに内的な〈目的〉によるというのが合理である。そしてそのことは［A 1.4.52 に対する］「[A 1.4.52 中に]『それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根の場合』と言われている」云々の［A 1.4.52 に対する］Bhāṣya によって主張されている[61]。

[VP 3.7.67.10 (Phullarāja)] evaṃ ca lādibhir apy antaraṅge bhāvyam ity antaraṅgabahiraṅgatām evāha—ādhāra iti /

そしてこのような場合、[内的な〈目的〉と外的な〈目的〉の二つの〈目的〉が〈行為〉の実現に関与する場合には] *l* 接辞等も内的な［〈目的〉] の表示のために生起すべきであるから、[バルトリハリは次の詩節（VP 3.7.68）においてまさに〈目的〉の] 内的在り方と外的在り方を「〈場〉」(*ādhāra*) というように述べる。

---

kta 接辞、***khal*** 接辞、***khal*** 接辞の意味を有する接辞はそれら［〈行為〉(bhāva) と〈目的〉] だけを表示する」）A 3.4.69 については本論 1.1 を見よ。

[57] *āsitavya* は krtya 接辞 *tavya*（A 3.1.96 tavyattavyānīyaraḥ）で終わる項目である。

[58] *āsita* は ***kta*** 接辞で終わる項目である。

[59] *svāsa* (*su-āsa*) は ***khal*** 接辞で終わる項目である。なお、***khal*** 接辞の導入規則は以下の規則である。A 3.3.126 īṣadduḥsuṣu kṛcchrākṛcchrārtheṣu khal //（「困難さ (kṛcchra)、容易さ (akṛcchra) を意味する*īṣat*（「わずかの努力で、わずかに」）、*dus*（「まずく、難儀して」）、*su*（「よく、容易に」）が共起項目 (upapada) であるとき、動詞語根の後に kṛt 接辞 ***khal*** が起こる」）***khal*** 接辞が〈目的〉を表示する場合は以下のような文が派生される。*īṣatkaro bhavatā kaṭaḥ*（「マットが君によって簡単に作られる」）

[60] ヘーラーラージャが VP 3.7.68 に対する注釈において引用する詩節である。VP 3.7.68.4 を見よ。プッララージャのこの詩節の扱いは、当該詩節がバルトリハリの作であることを示唆するが、Vākyapadīya 現行刊本にこの詩節はない。

[61] 本論 2 を見よ。

[VP 3.7.67.11] godohaṃ svapiti / yāvatā kālena gavāṃ dohaḥ samāpyata iti /

godohadm svapiti（「彼は牛の乳が搾られる間ずっと眠っている」）, は、「牛の搾乳が終了するまでの間［彼は眠っている］」（yāvatā kālena gavāṃ dohaḥ samāpyate）という意味である[62]。

[VP 3.7.67.12] krośādiḥ punaḥ svakālaparimāṇena kriyāntaraṃ paricchinatti / deśo 'pi kutaścid avadheḥ prāpyamāṇatayā paricchinnakālasvāpādiviśiṣṭahetur iti bhinnāḥ kālādayaḥ /

一方、クローシャ等［の道のり］は［それを踏破するに要する］自己の時間的分量によって［踏破の〈行為〉とは］別の〈行為〉を画定する。

国土もまた特定の出発点（avadhi）から［特定の地点へと到達されるべき］〈到達対象〉であるから[63]、［到達〈行為〉によって］画定された時間の間継続する睡眠等に対する限定的な因である[64]。このように時間等は区別される。

[VP 3.7.67.13] eteṣāṃ kālādīnāṃ sarvair evākarmakaiḥ sakarmakaiś cāpi dhātubhir yoge prākṛtam eva karmatvam upajāyata iti naiṣāṃ karmasaṃjñopasaṅkhyeyety arthaḥ /

［したがって当該 VP 3.7.67 が］意味するところは次のとおりである。

いかなる動詞語根と結合しようと、すなわち、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根と結合しようとそれが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根と結合しようと、これら時間等にはまさに本来的な（prākṛta）〈目的〉たる在り方（karmatvva）が生ずる。したがって、これらに〈目的〉という術語を付与する追加規定は定式化される必要はない。

[VP 3.7.67.14] tathā hi / na dvitīyāvidhānārtham eva karmasaṃjñātra, api tu lādyarthā api / tathā ca kālādhvanor atyantasaṃyoge ity atra vārttikam

atyantasaṃyoge karmaval lādyartham

iti / lakṛtyakhalarthā api saṃjñāphalam iṣyanta ity arthaḥ /

すなわち、この［パーニニ文法学］では、〈目的〉の術語規定は第二格接辞の導入操作のためだけにあるのではなく[65]、*l* 接辞等の［導入］も目的としている。

そしてそのような場合、A 2.3.5 kālādhvanor atyantasaṃyoge というこの規則に対する vārttika に次のように述べられている。

「『[時間・道のりの〈行為〉との] 不断の結合が理解されるべきとき、時間・道のりは〈目的〉とみなされる』と定式化されるべきである。L 接辞等によって表示されるように」[66]

l 接辞、kṛtya 接辞、***khal*** 接辞、***khal*** 接辞の意味を有する接辞［の導入］もまた［〈目的〉という］術語適用の果として望まれるという意味である。

[VP 3.7.67.15] atra kriyāntarasya vyāptilakṣaṇasyāpy āsyādidhātubhir aṅgīkṛtatvād vyāptikriyāviṣayabhāvopagamanena māsādi prāpyaṃ karmepsitatamam eveti

prākṛtam evaitat karma yathā ghaṭaṃ karoti śakaṭaṃ karotīti

bhāṣya uktam /

この場合、〈遍充〉と特徴付けられる別の〈行為〉もまた*ās* 等の動詞語根によって［それの意味として］受け入れられているから、〈遍充〉〈行為〉に対する対象性の獲得（viṣayabhāvopagama）［という〈ハタラキ〉］によって[67]、［時間としての］一ヶ月等は〈到達対象〉としての〈目的〉であり、［〈行為主体〉

[62] *kālena* というように第三格接辞が使用されている点に注目しなければならない。この第三格接辞の導入は次の規則による。A 2.3.6 apavarge tṛtīyā //（「〈行為〉の完了が標示されるという条件下で［〈行為〉・属性・実体の］時間・距離との不断の結合が理解さるべきとき第三格接辞が起こる」）例文 *māsenānuvāko 'dhītaḥ*（「ヴェーダ聖典の一章は一ヶ月かかって修了された」）*māsam adhīto nāyātaḥ*（「一ヶ月の間ずっと学習したが理解に達しなかった」）は、〈行為〉の完了が理解されない場合の事例である。

[63] この「国土」が村々等の集合を意味することはすでに述べた。注 10 を見よ。〈到達対象〉という〈目的〉に関しては小川 [2008: 29–32] を見よ。

[64] VP 3.9.77: kriyāntaraparicchedapravṛttā yā kriyāṃ prati / nirjñātaparimāṇā sā kāla ity abhidhīyate //（「[それ自身の時間的] 分量が周知されている［〈行為〉］は、別の〈行為〉の画定のための機能を果たすとき、［その画定の対象である］〈行為〉に関して『時間』と呼ばれる」）例えば太陽等の運行はそれの時間的分量が画定されているものである。よって「昼」等の語によって表示される。太陽の運行は他の〈行為〉の画定者である。

[65] A 2.3.2 karmaṇi dvitīyā //（「〈目的〉が表示されるべきとき、もしその〈目的〉が他の項目によって表示されていないならば、第二格接辞が起こる」）

[66] 本論 3.1 を見よ。

[67] 対象性の獲得という〈到達対象〉の〈ハタラキ〉については VP 3.7.55（小川 [2009: 41–42]）を見よ。

が］最も得ようと欲するものに他ならない。このことは以下の［A 2.3.5 に対する］Bhāṣya に次のように述べられている。

「これら［時間と道のり］は、*ghaṭaṃ karoti*（「彼は瓶を作っている」）、*śakataṃ karoti*（「彼は荷車を作っている」）における瓶や荷車と同じように、本来的な〈目的〉である」[68]

[VP 3.7.67.16] tathā hi, māsam āste, godoham āste, krośaṃ svapiti, kurūn svapitīti vyāpanāṅgam āsanādi dhātubhir abhidhatte māsaṃ vyāpyāste, māsam āsanayā vyāpnotīty arthaḥ / evam anyatra yathāyogaṃ yojyam /

すなわち、*māsam āste*（「彼は一ヶ月の間ずっと座っている」）、*godoham āste*（「彼は牛の乳が搾られる間ずっと座っている」）、*krośaṃ svapiti*（「彼は一クローシャ行く間ずっと眠っている」）、*kurūn svapiti*（「彼はクル国を行く間ずっと眠っている」）といった文は、〈遍充〉を従属要素とする座〈行為〉等を動詞語根によって表示している。「彼は一ヶ月を遍充して座っている」(māsaṃ vyāpyāste)「彼は一ヶ月を座〈行為〉によって遍充している」(māsam āsanayā vyāpnoti) という意味である。他の事例においても同様に解釈されるべきである。

[VP 3.7.67.17] tadyathā valāhakād vidyotate vidyud iti niḥsaraṇāṅge vidyotane dhātur vartate tathātra prāptyaṅge 'rthe dhātor vṛttiḥ / kriyāntaram evedam antarbhūtavyāptikaṃ kālādiviṣayam /

例えば、*valāhakād vidyotate vidyut*（「雲から稲妻が光る」）においては、[upasarga である *vi* に先行された］動詞語根［*dyut*］は発出（niḥsaraṇa）を従属要素とする発光〈行為〉(vidyotana) を表示する[69]。それと同じように、これらの事例においては到達〈行為〉(prāpti) を従属要素とする［座〈行為〉等の］意味を動詞語根は表示する。

まさにこの［従属〈行為〉とは異なる］他方の［主要］〈行為〉は、〈遍充〉〈行為〉を内包するから、時間等を対象とする。

[VP 3.7.67.18] devadattaḥ kiṃ karoti, āsta ity atra tu vyāptirahite dhātur āsanamātre vartate / tad etad yathāha

ekadeśe samūhe vā vyāpārāṇāṃ pacādayaḥ / svabhāvataḥ pravartante tulyarūpasamanvitāḥ //

pacati, pacyate svayam eveti tathātra bodhyam /

一方、*devadattaḥ kiṃ karoti—āste*（「デーヴァダッタは何をしているのか。彼は座っている」）というこの事例においては、動詞語根［*ās* は］〈遍充〉を欠いた単なる座〈行為〉を表示している。そのことは例えば次のように言われている。

「*pac* 等［の動詞語根］は、同じ語形を具えている限り［単一なるものであり、対象表示の］本性 (svabhāva) に基づいて、一部の〈ハタラキ〉と〈ハタラキ〉の集合の両者を表示する」(VP 3.7.58) [70]

pacati（「彼は料理している」）、*pacyate svayam eva*（「［粥が］まさに自ずと煮えている」）というこれらの事例においてはそのように理解すべきである[71]。

[VP 3.7.67.19] evaṃ copasaṅkhyānasya pratyākhyānād akarmakagrahaṇam anarthakam / sakarmakāṇām api māsam odanaṃ pacatītyādau māsāder vyāptiviṣayatvena karmatāsiddhiḥ / māsam odanapākena vyāpnotīty arthaḥ / etadarthaṃ cātra sarvagrahaṇaṃ vyākhyātam /

そしてこのような場合、[A 1.4.51 に対する ślokavārttika 14–15 の］追加規定は否定されるから、［追加規定中の］*akarmaka*（「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」）という語の言及は無意味である。その表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根の場合も、*māsam odanaṃ pacati*（「彼は一ヶ月の間ずっと粥を煮ている」）等においては、一ヶ月等は〈遍充〉の対象として〈目的〉であるこ

[68] MBh on A 2.3.5 (I.445.17): prākṛtam evaitat karma yathā kaṭaṃ karoti śakaṭaṃ karotīti / 本論 3.2 を見よ。

[69] ヘーラーラージャは当該の文の意味を次のように説明している。Prakāśa on VP 3.7.136: atra hi niḥsaraṇāṅge vidyotane vidyotanāṅge vā niḥsaraṇe vidyutir vartate iti niḥsaraṇalakṣaṇo 'pāyo vidyotanasya guṇapradhānabhāvenopāttaḥ / valāhakān niḥsṛtya jyotir vidyotate valāhakād vā vidyotamānaṃ niḥsaratīty arthaḥ /（「実にこの［*valāhakād vidyotate vidyut* という］事例においては、発出〈行為〉を従属要素とする発光〈行為〉、あるいは発光〈行為〉を従属要素とする発出〈行為〉を upasarga である *vi*-に先行された動詞語根 *dyut*（「閃光を発する」）は表示する。したがって、発出と特徴づけられる出離（apāya）が発光〈行為〉に対して主要なるものとしてあるいは従属するものとして得られる。『稲妻が雲から発出して光る』(valāhakān niḥsṛtya jyotir vidyotate) あるいは『雲から光を発しているものが発出する』(valāhakād vā vidyotamānaṃ niḥsarati) という意味である」）

[70] 本論 4.1 を見よ。

[71] *pacati* においては動詞語根 *pac* は軟化作用と軟化せしめる作用の二者の集合を表示し、一方 *pacyate svayam eva* においては動詞語根 *pac* はその一部である軟化作用だけを表示する。小川 [2009: 30–33] を見よ。

とが成立するからである。「彼は一ヶ月を粥を煮る〈行為〉によって遍充している」（māsam odanapākena vyāpnoti）という意味である。

そしてこの［VP 3.7.67 中の］「いかなる［動詞語根］と」（*sarvaiḥ*）という表現はこのことを意図して述べられていると説明される。

[VP 3.7.67.20] kālādikarmaṇā pacatyādīnāṃ dvikarmakatve 'pi pradhāne dravyakarmaṇi lādividhir uktaḥ

> pradhānakarmaṇy ākhyeye lādīn āhur dvikarmaṇām /

iti /

時間等の〈目的〉によって動詞語根 *pac* 等が二つの〈目的〉を有する場合があるとしても、主要なる実体〈目的〉の表示のために *l* 接辞等が導入されることが以下のように［A 1.4.51 に対するślokavārttika において］述べられている。

> Ślokavārttika 8「〈目的〉を二つ有する〈行為〉を表示する動詞語根の場合、〈目的〉が表示されるべきとき、主要〈目的〉の表示のために L 接辞等は起こると［文法家達］は言う」

[VP 3.7.67.21] saty api vāsyādīnāṃ vyāptikriyāntarbhāve kaṭa āsta ityādau kaṭāder āsanayā vyāptir nāsti, api tu māsādir evāsanādikriyāparicchedāyopādīyamāno vyāpyata iti tasyaiva karmatā na tu kaṭāder upaśliṣṭamātrasyādhikaraṇasyeti sarvaṃ sustham //67//

あるいは、たとえ座〈行為〉等は〈遍充〉〈行為〉を内包するとしても、*kaṭa āste*（「彼はマットの上に座っている」）等においては、マット等が座〈行為〉によって遍充されることはない。しかしながら、まさに一ヶ月等は、座〈行為〉等の〈行為〉を画定するために言及されるから、［座〈行為〉によって］遍充される。したがってまさにその［一ヶ月等］は〈目的〉であるが、マット等はただ単に［〈行為主体〉が］接するだけの〈基体〉（adhikaraṇa）であって［〈目的〉では］ない。かくしてすべてが問題なく成立する[72]。

[72] 〈基体〉には三種ある。(1) 結合（saṃyoga）や内属（samavāya）という関係で能依所依の関係（aupaśleṣika）にある〈基体〉、(2) 対象性（viṣayatā）の関係にある〈基体〉、(3) 遍充関係（abhivyāpaka）にある〈基体〉である。当該の事例におけるマットは (1) の〈基体〉であり、*mokṣe icchasti*（「解脱を対象とする欲求がある」）における解脱は (2) の〈基体〉、*sarvasminn ātmāsti*（「一切にアートマンがある」）における一切は (3) の〈基体〉である。SK 633 (A 2.3.36) を見よ。

VP 3.7.68

[VP 3.7.68.0] kathaṃ punaḥ kālādikarmāpradhānaṃ dravyakarma tu pradhānam ity āha /

［問］しかしどうして、時間等の〈目的〉は主要ならざるものであり、実体〈目的〉は主要なるものなのか。
［答］これに対して次のように［バルトリハリは］述べる。

> VP3.7.68: ādhāratvam iva prāptās te punar dravyakarmasu /
> kālādayo bhinnakakṣyaṃ yānti karmatvam uttaram //

> ［第一解釈］「しかしながら、それら時間等は、同じように、実体〈目的〉に対して〈場〉となっている。それらは、［〈行為〉と実体〈目的〉の関係が成立した］後に〈目的〉となる。［それら時間等の］〈目的〉たる在り方は［実体〈目的〉のそれと］地位を異にする」

> ［第二解釈］「しかしながら、それら時間等は、同じように、実体〈目的〉があるとき、［それを通じて〈行為〉の］〈場〉となっている。それらは、［〈行為〉と実体〈目的〉の関係が成立した］後に〈目的〉となる。［それら時間等の］〈目的〉たる在り方は［実体〈目的〉のそれと］地位を異にする」

[VP 3.7.68.1.1] kartṛkarmavyavadhānenādhāraḥ kriyāṃ dhārayati yathā, evaṃ māsādir apīty ādhāracchāyāṃ bhajate / tathā hi udite juhoti, rātrau bhuṅkte iti prayogaḥ /

〈行為主体〉あるいは〈目的〉を介して〈場〉（ādhāra）が〈行為〉を保持するように、一ヶ月等もまた［実体〈目的〉を保持する］、というように［時間等は］〈場〉との［保持の点での］類似性を有する。

すなわち、*udite juhoti*（「日の出時にホーマ祭を実践すべし」）*rātrau bhuṅkte*（「彼は夜に食べる」）といった言語使用がある。［これらの言語使用においては時間である日の出時、夜が〈場〉として〈行為主体〉あるいは〈目的〉を保持する。］

[VP 3.7.68.1.2] krośaṃ śete, kurūn svapiti iti ca sphuṭam evādhikaraṇatvam adhvadeśayoḥ kartṛdhāraṇāt / māsam odanaṃ pacatītyādau dravyakarmaviṣaye ca dravyakarmadhāraṇaṃ sphuṭam eva /

そして、*krośaṃ śete*（「彼は一クローシャ行く間ずっと寝ている」）、*kurūn svapiti*（「彼はクル国を行く間ずっと眠っている」）においては道のりと国土が〈基体〉であることはまったく明らかである。なぜならそれらは〈行為主体〉を保持するからである。

[VP 3.7.68.1.3] māsam odanaṃ pacatītyādau dravyakarmaviṣaye ca dravyakarmadhāraṇaṃ sphuṭam eva /

さらに、*māsam odanaṃ pacati*（「彼は一ヶ月の間ずっと粥を煮ている」）等の実体〈目的〉に関して起こる表現においては、[一ヶ月が] 実体〈目的〉[である粥] を保持することはまったく明らかである。

[VP 3.7.68.1.4] vyāptivivakṣāyāṃ tu karmatvam ādhārabhāvasyāpagamanād iti ivaśabdaḥ /

しかし〈遍充〉が表現しようと意図されるときには、[一ヶ月は]〈目的〉となる。なぜなら、〈場〉たる在り方が失われるからである。

以上が [バルトリハリが]「同じように」（*iva*「x のような」）という表現の使用によって意図していることである。

[VP 3.7.68.2] yadvā kartṛkarmavyavadhānena yathādhāraḥ kriyāyogaṃ bhajate tathā dravyakarmavyavadhānena kālādīty upamārthaḥ /

[第二解釈] あるいは、〈行為主体〉、〈目的〉を介して〈場〉が〈行為〉との関係を享受するように、実体〈目的〉を介して時間等も [〈行為〉との関係を享受する]、というのが「同じように」（直喩表示語 [upamā、*iva*]）の意味するところである。

[VP 3.7.68.3] dravyakarmaṇā ca pūrvaṃ kriyāyogaḥ / taddvāreṇa tu kālādikarmaṇeti bhinnā kakṣyā avasthāsya karmatvasya /

そして、〈行為〉はまず実体〈目的〉と結合する。一方、時間等の〈目的〉とはその [実体〈目的〉] を通じて結合する。したがって、[時間等の]〈目的〉たる在り方は [実体〈目的〉のそれと] 地位（kakṣyā）すなわち状態（avasthā）を異にする[73]。

[73]ヘーラーラージャは *bhinnakakṣya* は bahuvrīhi 複合語であり、karmatva（〈目的〉たる在り方）を指示することをここで説明している。

[VP 3.7.68.4] tathā hi

śaktipramāṇasaṅkhyāder dravyadharmād viśiṣyate /
kriyāsu kālayogo 'taḥ prāg yogo dravyakarmaṇā //

ity uktam /

すなわち、

「実体の属性である能力、分量、数等によって時間の〈行為〉との結合は差別化される。したがって、[〈行為〉は] 先に実体〈目的〉と結合する」[74]

[VP 3.7.68.5] kaṭhinasya hi pākyadravyasya cireṇa niṣpattiḥ, mahāparimāṇasya bahusaṅkhyākasya ca viparītasya tv acireṇeti dravyakarmākṣepaḥ kālādiviśeṣaḥ /

堅い料理物の場合、量の多い料理物の場合、数の多い料理物の場合、[軟化という料理〈行為〉の結果の] 実現には時間を要し、一方反対のものの場合には時間を要さないから、特定の時間等は実体〈目的〉[の属性] を含意する。

[VP 3.7.68.6] evaṃ godohaṃ svapiti, iṣupātaṃ pacatīty atrāpi vācyam /

godohaṃ svapiti（「彼は牛の乳が搾られる間眠っている」）、*iṣupātaṃ pacati*（「彼は矢が飛び交う間ずっと料理している」）というこれらの事例の場合も同様のことが言われるべきである。

[VP 3.7.68.7] krośam adhīte svādhyāyam, kurūn pañcālān adhīte ity atrādhyayanapracayāpacayāyattāv adhvadeśayor vṛddhihrāsāv iti viprakṛṣyate kālādikarma kriyāsaṃbandhaṃ prati dravyakarmāpekṣayā /

krośam adhīte svādhyāyam（「彼は一クローシャの距離を行く間ずっと自派のヴェーダ聖典を学習している」）、*kurūn pañcālān adhīte*（「彼はクル国を行く間、パンチャーラ国を行く間ずっと [自派のヴェーダ聖典を] 学習している」）というこれらの事例においては、道のりと国土の多寡・大小は（vṛddhihrāsa）はヴェーダ学習の多少（pracayāpacaya）に依存するから、時間等の〈目的〉は〈行為〉との関係に関し、実体〈目的〉に比べて [実体〈目的〉よりも〈行為〉から] 隔てられている。

[74]カイヤタが A 1.4.52 に対する Bhāṣya を注釈する際に引用する詩節とは b 句が異なる。カイヤタの引用詩節では *viśiṣyate* ではなく *pravartate* となっている。本論 5.3 を見よ。ヘーラーラージャの詩節引用後の詩節解釈は彼が詩節を *viśiṣyate* で理解していることを示している。

[VP 3.7.68.7] ata evottarakālabhavam eteṣāṃ karmatvam / samastasādhanasaṃbandhe hi vṛtte kriyāyāḥ paricchedahetavaḥ kālādayo 'pekṣyante iti bhinnakakṣyās te akathitaṃ ca ity uttareṇa yogena karmasaṃjñāṃ labhante, nepsitatamatvena, īpsāprakarṣābhāvāt /

まさにこの故にこれら［時間等の］〈目的〉たる在り方は後時に生ずる。実に、〈行為〉のすべての〈能成者〉との関係が起こってから、〈行為〉を画定する因として時間等が期待されるから、それら［時間等］の地位は異なり、したがってそれら［時間等］はA 1.4.51 akathitaṃ ca という［A 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma と A 1.4.50 tathāyuktaṃ cānīpsitam に］後続する規則によって〈目的〉という術語を獲得する[75]。しかし、［〈行為主体〉が座〈行為〉や睡眠〈行為〉を通じて］最も得ようと望んでいるということに基づいてそれらが〈目的〉と呼ばれるということはない。なぜなら、［〈行為主体〉にはそれらに対する］卓越した獲得意欲はないからである[76]。

[VP 3.7.68.8] duhyādipariganane cākathitasūtre

kālabhāvādhvagantavyāḥ karmasaṃjñā hy akarmaṇām deśaś ca

ity atraivoktam /

そして、まさにこのことに関して、A 1.4.51 の適用領域にある動詞語根の *duh* 等の完全枚挙に関連する以下［のślokavārttika が］述べられている。

Ślokavārttika 14「実に、『時間、行為 (bhāva)、踏破さるべき道のり (adhvagantavya) は、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根が表示する〈行為〉に関係して〈目的〉と呼ばれる』という追加規定が定式化されるべきである」

Ślokavārttika 15「さらに、『国土』はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［が表示する〈行為〉に関係して〈目的〉と呼ばれる』という追加規定が定式化されるべきである」[77]

[VP 3.7.68.9] guṇapradhānasannidhau ca pradhānam eva kāryeṇa yujyata iti dravyakarmaṇi lādividhiḥ / māsam odanaḥ pacyate, pakvaḥ, paktavyaḥ, supacaḥ krośam adhīto 'nuvāka ityādy udāhāryam /

そして、従属要素と主要素が共に在るとき、主要素こそが文法操作と結びつくから、実体〈目的〉の表示のために *l* 接辞等が導入される。

māsam odanaḥ pacyate（「一ヶ月の間ずっと粥が煮られている」）[78]、[*māsam odanaḥ*] *pakvaḥ*（「［一ヶ月の間ずっと粥が］煮られた」）[79]、[*māsam odanaḥ*] *paktavyaḥ*（「［一ヶ月の間ずっと粥が］煮られるべきである」）[80]、[*māsam odanaḥ*] *supacaḥ*（「［一ヶ月の間ずっと粥が］容易に煮られる」）[81]、*krośam adhīto 'nuvākaḥ*（「一クローシャ行く間ずっとヴェーダ聖典の一章が学習された」）[82]等が例示されるべきである[83]。

[VP 3.7.68.9] dvitīyā tu bhinnaśabdopādānā kālādikarmaṇy api bhavati / eko hi lādir guṇapradhānabhūtaṃ karmadvayam aśakto 'bhidhātum iti pradhāne kāryasampratyayaḥ / bhinnarūpaprātipadikadvayāt tu vibhaktir utpadyamānā karmadvayam api pratyāyayati //68//

しかし、時間等の〈目的〉［は *l* 接辞等によって表示され得る］としても、第二格接辞が［それら時間等の〈目的〉の表示のために *l* 接辞等とは］異なる項目として使用される。なぜなら、単一の *l* 接辞等が従属〈目的〉と主要〈目的〉の二つの〈目的〉を表示することはできないから、主要［〈目的〉］に関して文法操作が理解されるからである。しかし、異なる語形の二つの名詞語基の後に生起する名詞接辞（vibhakti）は二つの〈目的〉のいずれをも理解せしめる[84]。

---

[75] *sthālyām odanaṃ pacati*（「彼は鍋の中の粥を煮ている」）を前提して *māsaṃ sthālyām odanaṃ pacati*（「彼は鍋の中の粥を一ヶ月の間ずっと煮ている」）が成立する。本論 5.3 を見よ。

[76] 一ヶ月、牛の搾乳に要する時間、一クローシャの道のりの距離範囲、国土には、座〈行為〉、睡眠〈行為〉に相関して〈基体〉という kāraka 術語が適用し得る。このことが A 1.4.51 適用の根拠である。本論 4.2、5.2 を見よ。なお、A 1.4.49–50 については小川 [2008: 25–26] を見よ。

[77] 本論 1.2 を見よ。

[78] *l* 接辞の例。*l* 接辞に代置される *-te* は〈目的〉を表示する。

[79] ***kta*** 接辞の例。

[80] kṛtya 接辞 *tavya* の例。

[81] ***khal*** 接辞の例。

[82] ***kta*** 接辞の例。

[83] なお、A 2.3.2 karmaṇi dvitīyā は A 2.3.1 anabhihite（「x が表示されていないとき」）の支配下規則であるから、*l* 接辞等によって〈目的〉が表示されるときにはこれらの例文における実体〈目的〉表示語の後には第二格接辞は生起し得ず、A 2.3.46 prātipadikārthaliṅgaparimāṇavacanamātre prathamā により名詞語基の意味（prātipadikartha）だけの表示のために第一格接辞が生起する。

[84] 例えば、*māsam odanaṃ pacati devadattaḥ*（「デーヴァダッタは一ヶ月の間ずっと粥を煮ている」）においては第二格接辞 *-am* が名詞語基 *māsa* と *odana* の後に起こる。

VP 3.7.69

[VP 3.7.69.0] yataś ca kālādīnāṃ sarvadhātuviṣayaṃ bhinnakakṣyaṃ ca karmatvam,

そして、時間等の〈目的〉たる在り方はすべての動詞語根の領域にあり、[実体〈目的〉のそれとは] 異なる地位を有するから、[以下のことが言われる]。

VP3.7.69: atas taiḥ karmabhir dhātur yukto 'dravyair akarmakaḥ /
lasya karmaṇi bhāve ca nimittatvāya kalpate //

「したがって、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根は、それら実体ではない〈目的〉と結合するとき、〈目的〉を表示する *l* 接辞の導入の根拠となると同時に〈行為〉(bhāva) を表示する *l* 接辞の導入の根拠ともなる」

[VP 3.7.69.1] yatrāsti dravyakarma tatra tadapekṣayā kālādikarmaṇo 'pradhānyāl lādis tatra na bhavati / yatra tu dravyakarma nāsti tatra kālādāv eva karmaṇi lādiḥ /

実体〈目的〉があるところでは、それに相関して時間等の〈目的〉は非主要なものであるから *l* 接辞等はその [時間等の〈目的〉の] 表示のためには起こらない。一方、実体〈目的〉がないところではまさに時間等といった〈目的〉の表示のために *l* 接辞等が起こる。

[VP 3.7.69.2] lagrahaṇasyopalakṣaṇārthatvāc ca lakṛtyaktakhalarthāḥ āsyate māsaḥ, āsitavyaḥ, āsitaḥ svāsa ityādi /

さらに、[本詩節における] *l* 接辞の言及は典型例提示 (upalakṣaṇa) を目的としているから、*l* 接辞で終わる項目、kṛtya 接辞で終わる項目、***kta*** 接辞で終わる項目、***khal*** 接辞で終わる項目、***khal*** 接辞の意味を有する接辞で終わる項目 [が例示される]。

例えば、*āsyate māsaḥ*（「一ヶ月が座って過ごされる」）、*āsitavyaḥ* [*māsaḥ*]（「[一ヶ月が] 座って過ごされるべきである」）、*āsitaḥ* [*māsaḥ*]（「[一ヶ月が] 座って過ごされた」）、[*māsaḥ*] *svāsaḥ*（「[一ヶ月が] 容易に座って過ごされる」）等である[85]。

[85]これらの事例においては問題の接辞は〈目的〉を表示する。

[VP 3.7.69.3] akarmakavyapadeśaś ca dhātūnāṃ dravyakarmābhāvanimittaḥ, kālādikarmaṇaḥ sarvatra saṃbhavāt, saṃbhavavyabhicārābhyāṃ viśeṣaṇayogāt iti kālādikarmasaṃbhave 'py akarmakavyapadeśasya dravyakarmābhāvanimittasyāvyāvṛtter bhāve lakāraḥ siddhyati, māsam āsyate bhavatetyādi /

そして、動詞語根についての「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」(*akarmaka*) という呼称は、実体〈目的〉の非存在を根拠とする。なぜなら、時間等の〈目的〉はすべての [動詞語根] に可能であるからであり、限定可能性と逸脱性によって限定は合理性をもつからである。

したがって、[それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根には] 時間等の〈目的〉を有する可能性があるとしても、実体〈目的〉の非存在を根拠とする「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」という呼称は排除されないから、〈行為〉(bhāva) の表示のために *l* 接辞が生起することが成立する。*māsam āsyate bhavatā*（「君は一ヶ月の間ずっと座っている」）等の事例のように。

[VP 3.7.69.4] māsam āsito devadatta iti cākarmakatvāt kartari ktaḥ / gatyādisūtre cākarmakatvāśrayā prayojyasya karmasaṃjñā siddhyati māsam āsayati devadattam ityādau /

māsam āsito devadattaḥ（「デーヴァダッタは一ヶ月の間ずっと座っていた」）においては [動詞語根*ās* は] それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であるから、***kta*** 接辞は〈行為主体〉を表示する[86]。

そして A 1.4.52 gatibuddhipratyavasānārthaśabdakarmākarmakāṇām aṇikartā sa ṇau の適用領域では、[動詞語根*ās* は] それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたないということに依拠して、[*ās* に使役接辞 ***ṇic*** が後続する派生動詞語根が表示する〈行為〉の] 被使役者に〈目的〉という術語の適用が成立する。例えば *māsam āsayati devadattam*（「彼は一ヶ月の間デーヴァダッタをずっと座らせている」）等の事例におけるように。

[86]A 3.4.76 kto 'dhikaraṇe ca dhrauvyagatipratyavasānārthebhyaḥ //（「静的〈行為〉(dhrauvya) を表示する動詞語根、進行を意味する動詞語根、飲食を意味する動詞語根の後では、***kta*** 接辞は〈基体〉をさらに表示する」）静的〈行為〉を表示する動詞語根とはそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であり、その後に導入される ***kta*** 接辞は〈行為主体〉、〈行為〉(bhāva)、〈基体〉を表示する。

[VP 3.7.69.5] ata eva tatra

akarmakagrahaṇe kālakarmaṇām upasaṅkhyānam siddhaṃ tu kālakarmaṇām akarmakavadvacanāt

iti vārttikārtho nyāyasiddhaḥ /

まさにこの故に、その規則［A 1.4.52］に対する以下の vārttika の目的とするところは論理的に確立される。

Vt. 8「［規則中の］『それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根』の言及に関しては、『時間［等］を〈目的〉として有する動詞語根の場合も同様である』という追加規定が定式化されるべきである」

Vt. 9「しかし、［所期の事例は］成立する。なぜなら、『時間［等］を〈目的〉として有する動詞語根はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根に准ずる』と定式化されるべきであるから」[87]

[VP 3.7.69.6] tathā ca bhāṣyam /

na ca kecit kālabhāvādhvabhir akarmakāḥ / ta evaṃ vijñāsyāmaḥ kvacid ye akarmakā iti / athavā yena karmaṇā sakarmakāś cākarmakāś ca bhavanti tenākarmakāṇām / na caitena karmaṇā kaścid apy akarmakaḥ / athavā yatkarma bhavati na ca bhavati tenākarmakāṇām / na caitat karma kvacid api na bhavati /

iti /

そしてそのような場合、次のように Bhāṣya は述べている。

「［解釈 1］特定の動詞語根は、時間、行為（bhāva）、道のりによって、特定の時に（kadācit）、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根となる、ということはない。したがって我々は次のように考える。すなわち、特定の場合に（kvacit）それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であるもの、それが［『それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根』である］。

［解釈 2］ある〈目的〉によって、それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根とそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根とがあるとき、そのような〈目的〉によって、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［であるもの、それが当該規則では］*akarmaka* という語によって意図されている。しかし、この［時間等の］〈目的〉によっては、いかなる動詞語根もそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根とはなり得ない

［解釈 3］ある〈目的〉に存在するときと存在しないときがある場合、そのような〈目的〉によってそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根［であるもの、それが当該規則では *akarmaka* という語によって意図されている］。しかし、この［時間等の］〈目的〉は特定の場合には存在しないということはない」[88]

[VP 3.7.69.7] parihāratraye ko viśeṣaḥ / ucyate / śabdakarmākarmakāṇām ity atra avivakṣitakarmakā akarmakā āśrīyante / evaṃ hy āste śete iti kriyāmātravivakṣāyāṃ kālādibhir apy akarmakatvaṃ saṃbhavati /

［問］以上の三難点回避法にはどのような違いがあるのか。

［答］答えよう。

［A 1.4.52 における］「音声を〈目的〉とする動詞語根、それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」（*śabdakarmākarmakāṇām*）というこの表現においては、〈目的〉が表現しようと意図されない動詞語根がそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であることが認められている。

実にこのような場合、*āste*（「彼は座っている」）、*śete*（「彼は寝ている」）において、［〈遍充〉という部分を排して］ただ単に［座〈行為〉、寝〈行為〉という］〈行為〉だけが表現しようと意図されるならば、時間等によっても［それらが表現しようと意図されないならば］当該の動詞語根はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根であり得る。

[87]「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」とはそれが表示する〈行為〉が実体〈目的〉をもたない動詞語根であるから、*ās* が表示する座〈行為〉がたとえ〈時間〉等の〈目的〉を有する場合でも、A 1.4.52 は適用可能であり、さらに「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」の拡大適用の必要性もない。本論 2 を見よ。

[88] MBh on A 1.4.52 (I.338.6–9). 本論 2 を見よ。

[VP 3.7.69.8] tathaiva pacādīnām apy avivakṣayā karmasaṃbandhe 'pākṛte aṇi kartur ṇau karmasaṃjñāprasaṅgaḥ /

［しかしながら、］それとまった同じように、*pac* 等も［〈目的〉］を］表現しようと意図しないことによって〈目的〉との関係が排除されるならば、それらが使役接辞*ṇi(c)* を後続しない場合にそれらが表示する〈行為〉に対して〈行為主体〉であるものに、それらが*ṇi(c)* 接辞を後続する場合に〈目的〉という術語が適用されるという望ましくないことが帰結する[89]。

[VP 3.7.69.9] tasmād yasyātyantamasaṃbandhaḥ karmaṇā so 'karmakaḥ /

それゆえ、それが表示する〈行為〉が絶対的に〈目的〉と関係しない動詞語根がそれが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根である。

[VP 3.7.69.10] sa ca yadi dhātvartha āśrīyate tadā tasya kriyātmano vivakṣāvaśena karmasaṃbandhāsaṃbandhayor bhede kālādibhir apy akarmakatve vacanasya caritārthatvaṃ bhavet /

さらに、もし［A 1.4.52 中の *akarmakāṇām* によって動詞語根ではなくて］そのような［それの〈目的〉が表現しようと意図されない］動詞語根の意味が［意図されていると］認められるならば、その［動詞語根の意味である］〈行為〉自体が［〈目的〉に対する］表現意図［のあるなし］に基づいて〈目的〉と関係する場合と関係しない場合で異なることになり、時間等によっても［時間等の〈目的〉と関係する〈行為〉と関係しない〈行為〉は異なるから、時間等の〈目的〉と関係しない〈行為〉を］「〈目的〉をもたないもの」と呼ぶことができる。したがって、［「〈目的〉をもたない」という］言明は意義あるものとなるであろう。［しかしこの場合には、*māsam āsyate bhavatā* という文は派生し得ない。］

[VP 3.7.69.11] tasmād avidyamānaṃ karmāsyeti dhātur anyapadārthatvenāśrīyate / gatyādyarthatvenāṇau ṇāv iti ca tasyaiva viśeṣaṇatvena prakramāt /

それゆえ、［*akarmaka* という bahuvrīhi 複合語は］「それの〈目的〉が存在しない［動詞語根］」というように動詞語根が複合語構成要素以外の項目の意味（anyapadārtha）として認められる[90]。なぜなら、［A 1.4.52 においては、パーニニによって］進行等［の〈行為〉］を意味するものとして［の動詞語根が］企図されているからであり、さらに *aṇikartā* と *ṇau* というように言及される接辞*ṇi(c)* はまさにその［動詞語根］に対する限定者として企図されているからである[91]。

[VP 3.7.69.12] arthadvārake ca dhātoḥ karmayoge 'yoge ca rūpasyāviśeṣāt akarmakatvaṃ nopapadyate /

さらに、意味を通じてある動詞語根が〈目的〉と結合したりしなかったりする場合、［その動詞語根の］語形に違いはないから、［その動詞語根を］「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」と呼ぶことは妥当ではない。

[VP 3.7.69.13] kālādikarmabhiḥ sarveṣāṃ dhātūnām aviyogāt / evaṃ ca viśeṣaṇasāmarthyād viśiṣṭā eva dhātavo dravyakarmasamanvayarahitāḥ samāśrīyante / dravyakarmaviṣaye 'karmakā iti pūrvaparihārārthaḥ /

時間等の〈目的〉とどのような動詞語根も必ず結びつくから、そしてこのような場合、［「〈目的〉をもたない」という動詞語根に対する］限定者の言明効力を確保するために、特定の動詞語根は実体〈目的〉との結合を欠くと認められる。

実体〈目的〉の領域で「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」が成立する。［すなわち、*akarmaka* という語の表示対象はそれが表示する〈行為〉が実体〈目的〉をもたない動詞語根であるというのが］先行回避法の意味である。

[VP 3.7.69.14] dvitīye tu parihāre vartipadārthasya karmaṇaḥ sākṣātkriyopakārakatvenāntaraṅgatvaṃ viśeṣaḥ samāśritaḥ /

一方、第二回避法の場合は、［*akarmaka* という複合語の］構成要素［*karman*］の意味である〈目的〉には直接的に〈行為〉を扶助するものとして内的性（antaraṅgatva）という特性が認められる。

[VP 3.7.69.15] tṛtīye tu parihāre bhavati na bhavatīty abhidhānān niṣidhyamānasya saṃbandhasya viśeṣa āśrīyate / yena karmaṇā kadācit saṃbandho bhavati tenaiva dravyakarmaṇā akarmakāṇām, na nityasaṃbaddhena kālādikarmaṇety arthaḥ /

一方、第三回避法の場合は、「［ある〈目的〉に］存在するときと存在しないときとがある場合」と

[89] *devadattaḥ pacati* → *devadattena pācayati* (**devadattaṃ pācayati*)

[90] 本論 2.1 を見よ。

[91] A 1.1.72 yena vidhis tadantasya により、規則中の*ṇi* という項目は接辞*ṇi* で終わる動詞語根、*aṇi* は接辞*ṇi* で終わらない動詞語根を指示する。

述べられているから、否定される［〈行為〉と〈目的〉との］関係に［[*akarmaka* という複合語の構成要素 *karman* の意味である〈目的〉の］特性が認められる。

ある〈目的〉と関係する時があるとするなら、まさにその〈目的〉は実体〈目的〉であり、その〈目的〉によって「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」と［A 1.4.52 中に］述べられているのであって、恒常的に関係する時間等の〈目的〉によってそう述べられているのではない、という意味である。

[VP 3.7.69.16] dravyakarmāpekṣatvāc ca sakarmakākarmakavyapadeśasya / udaścaraḥ sakarmakāt ity anena māsam uccarati dhūma ity ātmanepadaṃ na bhavatīty āhuḥ //69//

そして、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根」、「それが表示する〈行為〉が〈目的〉をもたない動詞語根」という呼称は、実体〈目的〉を期待するから、A 1.3.53 udaś caraḥ sakarmakāt というこの規則によって *māsam uccarati dhūmaḥ*（「一ヶ月の間ずっと煙が立ち上っている」）というようにātmanepada接辞が起こることはない[92]。以上のように［パーニニ文法家達は］主張する。

参考文献・略号

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali, edited by F. Kielhorn, third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar.* 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1: 1962; 2: 1965; 3: 1972.

Joshi/Roodbergen. Joshi, S. D. and J.A.F. Roodbergen

1975 *Patañjali' s Vyākaraṇa-mahābhāṣya: Kārakāhnika (P. 1.4.23-1.4.55); Introduction, Translation and Notes.* Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit-C 10. Poona: University of Poona.

Giridhara Śarmā Caturveda and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara

1958-61 Śrī-bhaṭṭojī-dīkṣita-viracitā vaiyākaraṇa-siddhānta-kaumudī śrīmadvāsudeva-dīkṣita-praṇītayā bālamanoramākhya-vyākhyayā śrīmaj-jñānendra-sarasvatī-viracitayā tattva-bodhiny-ākhya-vyākhyayā ca sanāthitā. 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass.

Kielhorn, Lorenz Franz

1980–85 *The Vyākaraṇa-mahābhāshya of Patañjali.* 3 vols. Bombay Sanskrit and Prakrit Series, 18-22, 28-30. Bombay: Government Central Press. 1: 1880, 2: 1883, 3: 1885; reprint: Osnabrüuck: Zeller, 1970. 2nd edition: 1: 1892, 2: 1906, 3: 1909. 3rd edition: see K. V. Abhyankar [1962-72].

KV: *Kāśikāvṛtti*: Vāmana and Jayāditya's *Kāśikāvṛtti*. See Miśra [1985].

MBh: Patañjali's *Vyākaraṇamahābhāṣya*. See Abhyankar [1962–72].

Miśra, Śrīnārāyaṇa

1985 *Kāśikavṛtti of Jayāditya-Vāmana, along with Commentaries Vivaraṇapañcikā—Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra.* 6 vols. Ratnabharati Series 5–10. Varanasi: Ratna Publications.

Nyāsa: Jinendrabuddhi's *Nyāsa*. See Miśra [1985].

Ogawa, Hideyo（小川　英世）

2000 「バルトリハリの〈能成者〉論」『インドの文化と論理　戸崎宏正博士古希記念論文集』（九州大学出版会）533–584

2008 「Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」（Sādhana-samuddeśa）の研究—VP3.7.45–54:〈目的〉（karman）論序」

2009 「Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」（Sādhana-samuddeśa）の研究—VP3.7.55–58:〈目的・行為主体〉（karmakartṛ）論（１）」『比較論理学研究』6: 23–40.

2010 「Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」（Sādhana-samuddeśa）の研究—VP3.7.59–63:〈目的・行為主体〉（karmakartṛ）論（２）」『比較論理学研究』7: 7–28.

2011 「Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」（Sādhana-samuddeśa）の研究—VP3.7.64–66:〈目的・行為主体〉（karmakartṛ）論（３）」『比較論理学研究』8: 33–57.

Pradīpa: Kaiyaṭa's *Pradīpa*. See Vedavrata.

Prakāśa: Helārāja's *Prakāśa*. See Subramania Iyer.

Raghunātha Śarmā (Sharmā)

1979 *Vākyapadīyam, Part III, vol. 2 (Bhūyodravya, Guṇa, Dik, Sādhana, Kriyā, Kāla, Puruṣa, Saṅkhyā, Upagraha and Liṅga Samuddeśa) with the Commentary Prakāśa by Helārāja and Ambākartrī by Pt. Raghunātha Śarmā.* Sarasvatī Bhavana Grantha-mālā, 91. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University.

Rau, Wilhelm

[92] この規則は、〈目的〉を有する〈行為〉を表示する、upasarga である *ud* に先行された動詞語根 *car* の後にātmanepada 接辞が起こることを規定している。一ヶ月は upasarga である *ud* に先行された動詞語根 *car* が表示する〈行為〉に対して〈目的〉であるとしても実体〈目的〉ではない。規則中の「〈目的〉」は実体〈目的〉を指示する。適用例は *geham uccarate*（「彼は家を捨てる」）である。

1977 *Bhartṛharis Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen.* Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

SK: Bhaṭṭoji Dīkṣita's *Vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī.* See Giridhara Śarmā Caturveda and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara.

Subramania Iyer, K. A.

1963 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part 1.* Deccan College Monograph Series 21. Poona: Deccan College.

1971 *The Vākyapadīya of Bhartṛhari, chapter III, part 1; English translation.* Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series, 71. Poona: Deccan College.

Uddyota: Nāgeśa's *Uddyota*. See Vedavrata.

Vedavrata

1962–63 *Śrībhagavat-patañjali-viracitaṃ Vyākaraṇa-Mahā-bhāṣyam (Śrī-kaiyaṭa-kṛta-pradīpena nāgojībhaṭṭa-kṛtena-bhāṣya-pradīpoddyotena ca vibhūṣitam).* 5 vols. Gurukul Jhajjar (Rohatak): Hairyāṇā-Sāhitya-Saṃsthānam.

VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. See Rau.

（おがわ　ひでよ、広島大学［インド哲学］）